大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書　第81集

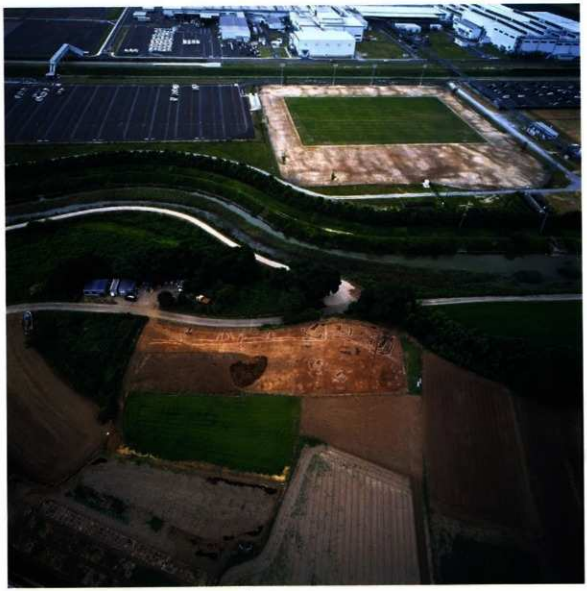
定留鬼塚遺跡
SADA NOMI

臨港道路中津港線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2015

大分県教育庁埋蔵文化財センター

A区空中写真（南から）



B区空中写真（西から）

序　文

本書は、国土交通省九州地方建設局別府港湾・空港整備事務所が実施している臨港道路中津港線の建設工事に伴って行われた定留鬼塚遺跡の発掘調査報告書です。発掘調査は土地買収の進捗にあわせ、平成23年度と平成25年度に2回に分けて実施しました。

その結果、本書に収録されているように、小規模な横穴式石室を持つ古墳群が確認されました。全て墳丘を失っていたとはいえ、石室の一部が残り、当地では珍しい古墳群として注目されるものであります。中津市は周防灘に面し、瀬戸内海を通して様々な文化を吸収してきた地域です。その中で、周防灘に面した天貝川河口に造られた古墳群は、海を意識した民の奥津城であったものと考えられます。

今回の調査結果が地域の歴史を解明する資料となり、また文化財に対する意識を高める一助となることを願うとともに、調査全般にわたりましてご協力頂いた地元教育委員会や地域の方々に対しまして、心より御礼申し上げます。

平成27年3月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター
所長　松村　洋一

例　言

1　本書は、国土交通省九州地方建設局別府港湾・空港整備事務所より委託を受け大分県教育委員会が実施した、臨港道路中津港線建設工事に伴う発掘調査の報告書である。

2　本書には、平成23年度と同25年度に実施した定留鬼塚遺跡1次・2次調査の調査成果を収載している。

3　調査は平成23年度が（株）イビソク、平成25年度が（株）島田組にそれぞれ一部業務を委託して実施した。

4　出土遺物の整理作業については、平成25年度と同26年度に（株）九州文化財総合研究所に委託して実施した。

5　出土遺物はすべて大分県教育庁埋蔵文化財センター（大分市中判田）で保管している。

6　遺構図については、五十川育子（大分県教育庁埋蔵文化財センター嘱託）が編集を行った。

7　本書の執筆は、第3章第2節の旧石器を除く遺物を五十川が、旧石器を綿貫俊一（大分県教育庁埋蔵文化財センター主幹）が担当し、それ以外を小柳和宏（大分県教育庁埋蔵文化財センター参事）が担当した。

8　本書の編集は小柳・五十川が行った。

目　次

巻頭カラー
序文
例言

第1章　はじめに
第1節　調査に至る経緯 …… 1
第2節　調査の経過 …… 1
第3節　調査組織の構成 …… 2

第2章　遺跡の立地と環境
第1節　地理的環境 …… 3
第2節　歴史的環境 …… 3

第3章　調査の成果
第1節　調査の概要 …… 6
第2節　遺構と遺物
（1）　A区 …… 10
（2）　B区 …… 22

第4章　総括 …… 59

遺物一覧表
写真図版

挿図目次

第1図　周辺の遺跡 …… 4
第2図　明治33年作成地形図 …… 5
第3図　周辺地形図 …… 7
第4図　A・B区調査区配置図 …… 8
第5図　B区調査区配置図 …… 9
第6図　A区遺構配置図とグリッド番号 …… 10
第7図　A区第1号墳 …… 11
第8図　A区第1号墳主体部 …… 12
第9図　A区第1号墳主体部土層 …… 13
第10図　A区第1号墳エレベーション図 …… 14
第11図　中津市教委調査区との合成図 …… 14
第12図　A区第1号墳出土遺物1 …… 15
第13図　A区第1号墳出土遺物2 …… 16
第14図　A区SK014出土遺物 …… 16
第15図　A区第3号墳 …… 17
第16図　A区第3号墳出土遺物 …… 17
第17図　A区SD016 …… 18
第18図　A区SD016出土遺物1 …… 18
第19図　A区SD016出土遺物2 …… 19
第20図　A区SD003・SK004・SD022 …… 19

第 21 図　A 区 SD003・SD022 ほか土層 …… 20
第 22 図　A 区 SD022 出土遺物 …… 20
第 23 図　A 区 SD025・SK026 …… 21
第 24 図　A 区 SD025 出土遺物 …… 21
第 25 図　A 区 SK015 …… 21
第 26 図　A 区 SK015 出土遺物 …… 21
第 27 図　B1 区遺構配置図とグリッド番号 …… 22
第 28 図　B2 区遺構配置図とグリッド番号 …… 23
第 29 図　B3・B4 区遺構配置図とグリッド番号 …… 24
第 30 図　B3 区南壁土層 …… 25
第 31 図　B2 区第 4 号墳 …… 25
第 32 図　B2 区第 5 号墳 …… 26
第 33 図　B2 区第 6 号墳 …… 26
第 34 図　B2 区第 7 号墳 …… 27
第 35 図　B2 区第 7 号墳主体部 …… 28
第 36 図　B2 区第 8 号墳 …… 29
第 37 図　B2 区第 9 号墳 …… 30
第 38 図　B2 区第 9 号墳主体部 …… 31
第 39 図　B2 区第 9 号墳出土遺物 …… 32
第 40 図　B2 区第 10 号墳 …… 33
第 41 図　B3 区第 11 号墳 …… 34
第 42 図　B3 区第 12 号墳 …… 34
第 43 図　B3 区第 13 号墳 …… 35
第 44 図　B3 区第 14 号墳 …… 35
第 45 図　B3 区第 15 号墳 …… 36
第 46 図　B3 区第 15 号墳主体部 …… 37
第 47 図　B3 区第 15 号墳出土遺物 …… 38
第 48 図　B3 区第 16 号墳 …… 38
第 49 図　B3 区第 16 号墳主体部 …… 39
第 50 図　B3 区第 17 号墳 …… 40
第 51 図　B3 区第 17 号墳主体部 …… 40
第 52 図　B3 区第 18 号墳 …… 41
第 53 図　B3 区第 18 号墳上層 …… 42
第 54 図　B3 区第 18 号墳出土遺物 …… 42
第 55 図　B3 区 SD149 出土遺物 …… 42
第 56 図　B3 区第 18 号墳主体部 …… 43
第 57 図　B3 区第 19 号墳 …… 44
第 58 図　B3 区第 19 号墳主体部 …… 44
第 59 図　B3 区第 20 号墳 …… 45
第 60 図　B3 区第 20 号墳主体部 …… 45
第 61 図　B4 区第 21 号墳・SD3002 …… 46
第 62 図　B4 区第 21 号墳・SD3002 土層 …… 47
第 63 図　B1 区 SD2001 …… 48
第 64 図　B1 区 SD2001 出土遺物 …… 48
第 65 図　B3 区 SD132 …… 49
第 66 図　B3 区 SD132 出土遺物 …… 49
第 67 図　B4 区 SD3003 …… 50
第 68 図　B2 区 SK1008 …… 51
第 69 図　B2 区 SK1008 出土遺物 …… 51
第 70 図　B2 区包含層出土遺物 …… 51
第 71 図　B3 区包含層出土旧石器分布図 …… 53
第 72 図　B3 区包含層出土旧石器 1 …… 54
第 73 図　B3 区包含層出土旧石器 2 …… 55
第 74 図　B3 区包含層出土旧石器 3 …… 56
第 75 図　B3 区包含層出土旧石器 4 …… 57
第 76 図　B3 区包含層出土旧石器 5 …… 58
第 77 図　古墳時代の推定海岸線 …… 60

表 目 次

第 1 表　周辺の遺跡 …… 5
第 2 表　遺構一覧表 …… 6
遺物一覧表 …… 63

写 真 図 版

巻頭図版 1　A 区空中写真
巻頭図版 2　B 区空中写真
図 版 1　A 区／B3 区 空中写真
図 版 2　B3 区／第 17・18 号墳／B2 区 空中写真
図 版 3　A 区／第 1 号墳
図 版 4　第 1 号墳／第 3 号墳／第 4 号墳
図 版 5　第 6 号墳／第 7 号墳／第 8 号墳
図 版 6　第 8 号墳／第 9 号墳／第 10 号墳／B3 区
図 版 7　B3 区／第 11 号墳／第 12 号墳／第 13 号墳
図 版 8　第 14 号墳／第 15 号墳／第 16 号墳
図 版 9　第 16 号墳／第 17 号墳／第 18 号墳
図 版 10　第 18 号墳／第 19 号墳／第 20 号墳／第 21 号墳
図 版 11　第 21 号墳／SD016／SD022／SD3003／SD2001
図 版 12　出土遺物
図 版 13　出土遺物

第1章　はじめに

第1節　調査に至る経緯

平成16年、中津港に近い埋め立て地にダイハツ工業が進出し、自動車製造を始めた。そのため、内陸部にある広域道路網（国道10号北大バイパスや工事中の東九州自動車道など）との接続が課題となり、県と国土交通省大分河川国道事務所は中津日田道路を整備し、川国道10号や東九州道との接続は確保されることになった。しかし、中津側の終点がダイハツ工業のある定留インターチェンジであったため、中津港までは旧道を迂回することになり、交通渋滞が発生していた。そのため、国土交通省九州地方建設局別府港湾・空港整備事務所（以下、国交省別府とする）では定留ICから中津港までの約3.5kmのバイパス整備を行うことになったのである。

平成20年には、国交省別府より大分県文化課に対して工事計画が示され、埋蔵文化財の所在確認依頼があった。そのため、文化課から調査を依頼された埋蔵文化財センターでは分布調査を実施し、2カ所の遺跡を確認した。

それを受け、平成22年10月に国交省別府より文化課に対し2カ所の試掘依頼があり、埋蔵文化財センターでは同年12月に買収済み部分の試掘調査を実施した。その結果、2カ所とも遺構が残されていることが明らかとなり、本調査を実施することとなったのである。

第2節　調査の経過

本調査は、用地の関係で平成23年度と同25年度の2回に分けて実施した。その間、用地買収が済んだ箇所について随時試掘調査（確認調査）も実施し、本調査箇所を絞り込んだ。その結果、第3図に図示するように A、Bの2地点で本調査を実施した。以下、年度ごとの調査経過を記す。

平成23年度

平成23年 6月 3日　事前準備
6月10日　A区表土剥ぎ
6月14日　A区作業員による遺構検出開始
6月15日　A区遺構掘り下げ開始
6月22日　B3区北半表土剥ぎ開始
6月28日　B3区北半遺構検出作業開始
7月 1日　B3区北半遺構掘り下げ開始
7月 8日　A区の遺構が横穴式石室であることを確認
7月12日　B3区北半にも4基程度横穴式石室があることが判明
7月13日　B3区北半の空中写真撮影
7月15日　B3区南半の表土剥ぎ開始
7月22日　A区空中写真撮影、B3区南半の遺構検出開始
7月25日　B3区南半で6基の横穴式石室を確認
7月29日　A区調査終了
8月 1日　B3区南半で旧石器時代の包含層掘り下げ
8月 5日　B3区南半空中写真撮影
8月12日　B3区調査終了

平成 25 年度

平成 25 年 6 月 5 日　事前準備

6 月 17 日　B2 区表土剥ぎ開始

6 月 18 日　B1 区表土剥ぎ開始

6 月 19 日　B4 区表土剥ぎ開始

6 月 25 日　B2 区遺構検出作業開始

6 月 28 日　B2 区遺構掘り下げ開始

7 月 2 日　B2 区古墳石室 7 基確認

7 月 8 日　B1 区遺構検出作業開始

7 月 9 日　B1 区遺構掘り下げ開始

7 月 18 日　B4 区遺構検出作業開始

7 月 18 日　B4 区遺構掘り下げ開始、石室 1 基を確認

8 月 3 日　B 区全体空中写真撮影

8 月 7 日　B 区全体調査終了

第 3 節　調査組織の構成

平成 23 年度

埋蔵文化財センター	所長	山口	博文
〃	管理予算班課長補佐（総括）	奉山	義光
〃	管理予算班副主幹	徳脇	仁志
〃	受託事業班課長補佐（総括）	小柳	和宏

平成 25 年度

埋蔵文化財センター	所長	宮内	克己
〃	管理予算班課長補佐（総括）	奉山	義光
〃	管理予算班主査	山村	光広
〃	受託事業班参事（総括）	小柳	和宏

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

旧中津市域は、天正期に黒田如水によって城と城下町が作られた山国川流域の中津平野（標高数ｍ）と、山国川右岸に広がる比高差 10ｍほどの洪積台地である下毛原とに大きく分けることが出来る。今回報告する定留鬼塚遺跡は、後者の下毛原末端の臨海部に位置している。下毛原は、全体的に見て南西部端が最も高く標高 40ｍほど、そこから約５km北東に傾斜しながら海に向かい、標高 7ｍほどとなる。台地上は小さな河川が南西から北東に向かって多く流れており、台地上は小さな凹凸が無数に見られる。特に、国道 213 号（旧国道 10 号）より北側は谷が深く、以前は満潮時に海水が入ってきていたと言われる。古代、菅原道真が太宰府に流される途中、上陸したとされる中津市犬丸の地は、現海岸線より１km以上内陸部に入る地点である。

定留地区は、下毛原の北東部を占め、平坦な台地と小さな谷部が交互に繰りなす開放的な地区である。定留鬼塚遺跡は、下毛原南西部の御澄池から主に流れ下る天貝川の河口部に位置する。現在は、ダイハツ工業が立地する埋め立て地と対峙する位置になるが、明治段階の地形図では、やや内湾状となった海に面する崖面上であったことがわかる（第２図参照）。

次に、やや微視的な視点で見ると、Ｂ区北側にはごく浅い谷が入っており、Ｂ区は南の天貝川と浅い谷に挟まれた細長い丘陵先端部ということになる。

ところで、下毛原での土地利用を見てみると、明治段階では畑地と水田が拮抗しているように見える。しかし、これは元禄２年（1689）に完成した荒瀬井路によって水が台地上に大量に安定的に供給できるようになったことによる。それ以前は、御澄池も含めて小さな谷の谷頭にため池を作り、そこからの配水で谷水田を営むのが常態であったと思われる。ため池灌漑そのものは、御澄池の構築年代などを考えると古代まで遡る可能性が高い。

第２節　歴史的環境

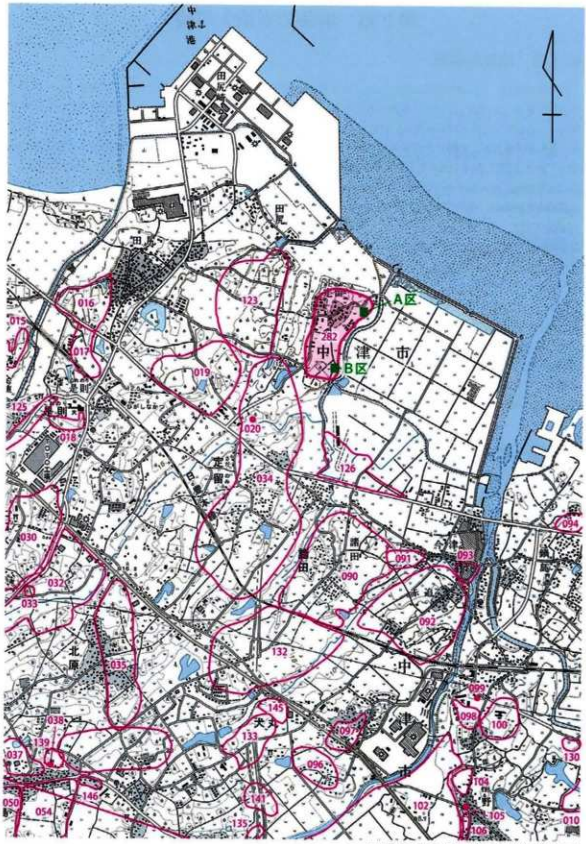
定留地区は、様々な開発に伴って発掘調査が実施されている。それらによると、下毛原台地の北東部、定留地区から諸田地区にかけては、弥生時代以前に遡る遺跡は少なく、古墳時代後期から多くの遺跡の形成が始まる。特に小さな谷の周辺部には古墳時代後期の集落が立地し、また場所を変えて古代の集落が引き続き見られる。中世になると、区画を持つような集落跡が点在する。

このような遺跡動向を示す地区は大分県内では珍しい。その理由として考えられるのが、定留遺跡八反ガソウ地区のたこ窓およびその焼成坑の出土に見られるように、海への依存度を高めていったことがあげられる。それは、古墳時代後期から奈良時代にかけて、下毛原台地の南に展開する山裾部で須恵器が焼かれ（伊藤田窯跡群）、さらに７世紀代の横置き箱形の製鉄炉が確認されるなど、生産活動が分業化されるという背景があってのことであろう。

今回報告する定留鬼塚遺跡の時代、すなわち古墳時代後期に限って言えば、下毛原の西端部の崖に穿たれた横穴墓は、東部では確認されていない。下毛原東端部のラインは、西端部ほど切り立った崖になっておらず横穴墓を造ることが出来なかったものであろう。台地上にも墳丘を持つ古墳の存在は知られていない。古墳時代の集落は平坦部で確認されるものの、墓は見つからない、という状況が続いていたが、今回の定留鬼塚遺跡の発見によって、下毛原東端部ラインでは、低墳丘の横穴式石室墳が崖に沿うようにして造られていたことがわかった。

参考文献

『福島遺跡入垣地区（Ⅲ）／定留遺跡向地区』　中津市教育委員会　1998
『定留遺跡田畑地区』　中津市教育委員会　2005
『定留遺跡八反ガソウ遺跡』　中津市教育委員会　2006



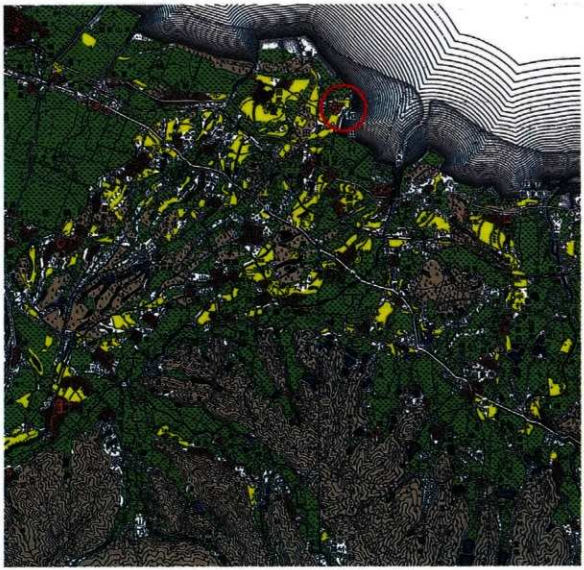
(国土地理院 1/25,000 「中津」「宇佐」「土佐井」「中山」より)

第１図　周辺の遺跡（1/25,000）

第１表　周辺の遺跡

第１図の番号に対応

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
10	一ツ松城跡	中世	50	鍋島遺跡	縄文・弥生・中世	105	植野貝塚	縄文
15	金銅遺跡	弥生・古墳	54	三保遺跡	弥生・古墳	106	植野古城遺跡	弥生・古墳
16	舞手橋東段上遺跡	弥生	90	諸田遺跡	弥生・古墳・中世	123	田尻大迫遺跡	古墳
17	是所遺跡	弥生・古墳	91	岩丸城跡	中世	125	舞手川流域遺跡	古墳・中世
18	安松遺跡	古墳・中世	92	十前坪遺跡	古墳・中世	126	天見遺跡	縄文・古墳
19	是俗遺跡	古墳	93	末広城跡	中世	130	古田遺跡	縄文
20	和間貝塚	縄文	94	鍋島遺跡	弥生・古墳	132	諸田南遺跡	古墳・中世
30	上郡水遺跡	弥生・古墳	96	中尾城跡	中世	133	上畑成遺跡	中世
32	大栖流地区条里跡	古代・中世	97	犬丸城跡	中世	135	馬下遺跡	古代・中世・近世
33	原遺跡	古墳	98	若旅遺跡	弥生・古墳	139	町屋屋敷遺跡	中世
34	定留遺跡	弥生・古墳・中世	99	若旅古墳	古墳	141	北小松肥遺跡	古墳
35	北原遺跡	弥生・古墳	100	中原遺跡	古代	145	田代遺跡	弥生・古墳・中世
37	田丸城跡	中世	102	野俣地区条里跡	古代・中世	146	畑中遺跡	奈良・中世
38	長久寺貝塚	縄文・中世	104	植野御蔵遺跡	弥生・古墳	282	定留鬼塚遺跡	古墳・古代



第２図　明治 33 年作成地形図（地目別に色分け）

第3章　調査の成果

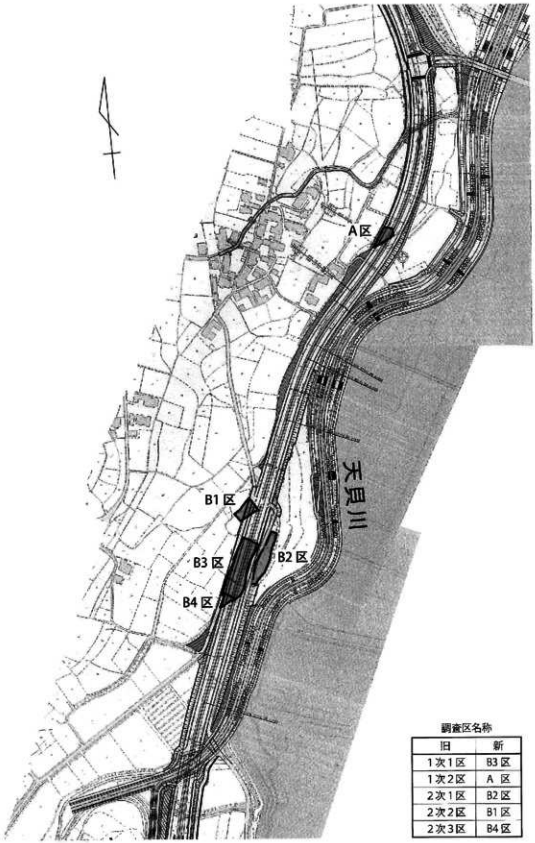
第1節　調査の概要

調査は2カ年度にわたって5地区で行われたが、煩瑣を避けるため調査時の呼称を用いず、第3図のように呼ぶこととする。遺構の対応表を表2に示す。A区とB区は直線距離で450mほど離れているが、古墳時代当時は海に面した同じ一続きの台地の端部ということになる。A区では2基の古墳、B区では18基の古墳が確認された。

確認された古墳は、いずれも墳丘は残存せず、石室の床面近くがかろうじて残っているものが大半であった。床面の石が剥がされているものもあった。また、一部には周溝が残っているものがあり、方墳と円墳があったことが知れた。さらに、長大な墓道をもつものがある点も注目される。出土遺物は少なく、刷毛目を持っているものもほとんどなかった。このような中、A区第1号墳は墓道や石室から須恵器を多く出土するなど、やや特異な古墳であった。

第2表　遺構一覧表

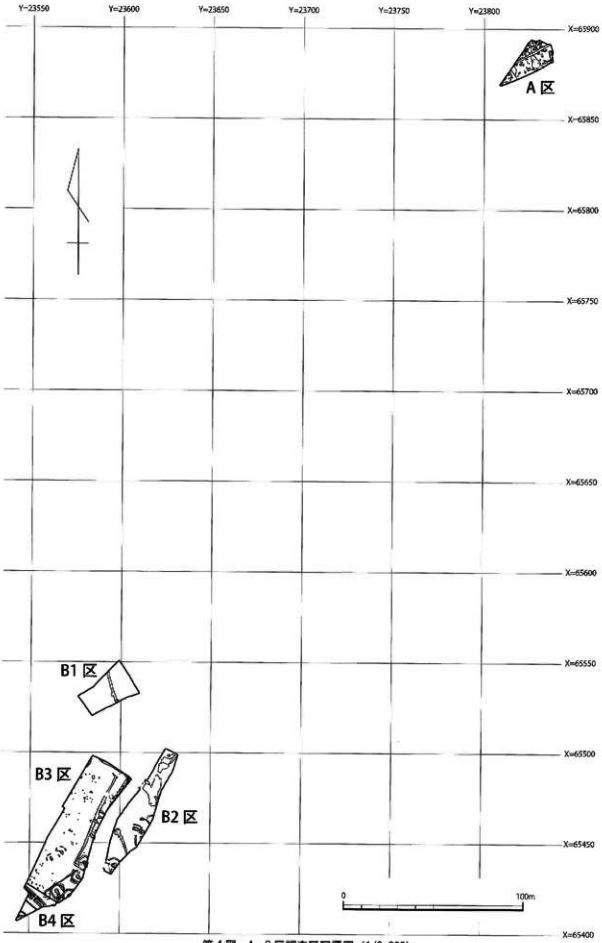
遺構番号	旧番号	調査区	グリッド	種別	備　考
第1号墳	1次2区　S079	A区	A/B-3	古墳	石室と墓道のみ
第3号墳	1次2区　S024	A区	B-4	古墳	石室と墓道のみ
第4号墳	2次1区　S1011	B2区	H-8	古墳	石室のみ
第5号墳	2次1区　S1010	B2区	J-8	古墳	墓道のみ
第6号墳	2次1区　S1009	B2区	J-8	古墳	石室と墓道のみ
第7号墳	2次1区　S1005	B2区	K-7/8	古墳	石室と墓道のみ
第8号墳	2次1区　S1004	B2区	K-7/8	古墳	石室のみ
第9号墳	2次1区　S1002	B2区	K/L-6/7	古墳	石室と墓道のみ
第10号墳	2次1区　S1001	B2区	L/M-6	古墳	
第11号墳	1次1区　S130	B3区	I-6	古墳	石室と墓道のみ
第12号墳	1次1区　S111	B3区	J-5/6	古墳	石室と墓道のみ
第13号墳	1次1区　S108	B3区	J-5	古墳	石室と墓道のみ
第14号墳	1次1区　S109	B3区	K-5	古墳	石室のみ
第15号墳	1次1区　S133	B3区	L/M-4/5	古墳	
第16号墳	1次1区　S134	B3区	M/N-4	古墳	
第17号墳	1次1区　S138	B3区	N/O-3/4	古墳	
第18号墳	1次1区　S135	B3区	N-O-3	古墳	
第19号墳	1次1区　S139	B3区	L-3/4	古墳	
第20号墳	1次1区　S136	B3区	L-3	古墳	
第21号墳	2次3区　S3001	B4区	P-1	古墳	大半調査区外
SD003	1次2区　S003	A区	C-2	溝	
SD016	1次2区　S016	A区	A/B-2/3/4	溝	
SD022	1次2区　S022	A区	C-2	溝	
SD025	1次2区　S025	A区	B-4	溝	
SD2001	2次2区　S2001	B1区	B/C/D-6	溝	
SD132	1次1区　S132	B3区	M/N-2//34	溝	
SD149	1次1区　S149	B3区	O-3	溝	
SD3002	2次3区　S3002	B4区	O/P-1	溝	
SD3003	2次3区　S3003	B4区	N/O-1/2	溝	
SK004	1次2区　S004	A区	C-2	土坑	
SK014	1次2区　S014	A区	A-3	土坑	
SK015	1次2区　S015	A区	C-3	土坑	
SK026	1次2区　S026	A区	B-4	土坑	
SK1008	2次1区　S1008	B2区	K-8	土坑	



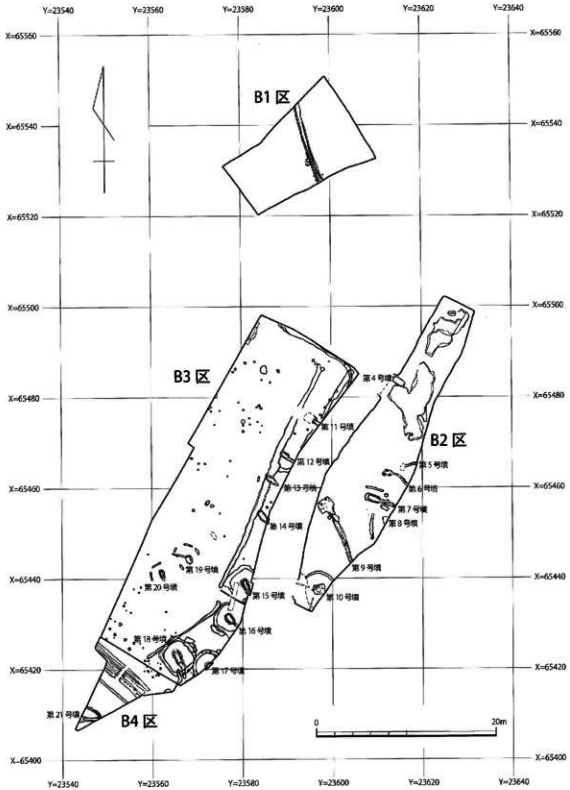
調査区名称

旧	新
1次1区	B3 区
1次2区	A 区
2次1区	B2 区
2次2区	B1 区
2次3区	B4 区

第 3 図　周辺地形図（国土交通省作成工事図使用）



第４図　Ａ・Ｂ区調査区配置図（1/2,000）



第5図　B区調査区配置図（1/800）

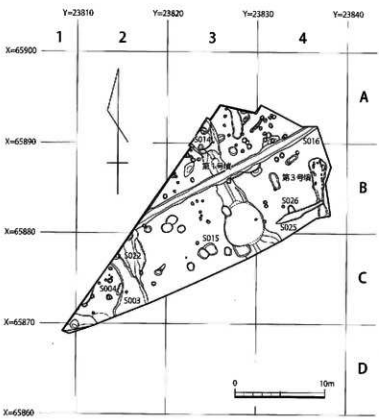
第2節　遺構と遺物

（1）A区

調査区は、現在では海岸部から200m南に入り、東側は川を挟んでダイハツ工業の工場が広がり海は見えないが、古墳時代にはすぐ東側は海で、北側も至近まで海だったと考えられる。つまり、下毛原の台地の最東北端にあたり、まさに海に面した立地であったことになる。調査に入った段階では、過去の土取りによって北東側が大きく削られており、本来であればもう少し台地が延びていたはずであるが、それは確認できなかった。

遺構は、古墳2基と溝、その他の性格不明な土坑1基である。

なお、県で調査を行った後、隣接地の狭地で中津市教育委員会が調査を行っている。その時の図面と合わせた図が第11図であるが、中津市が「第2号墳」とした石室は、県調査区内では確認できなかったため、県調査区内で確認された古墳2基は、A区第1号墳（中津市の「第1号墳」）とA区第3号墳とする。



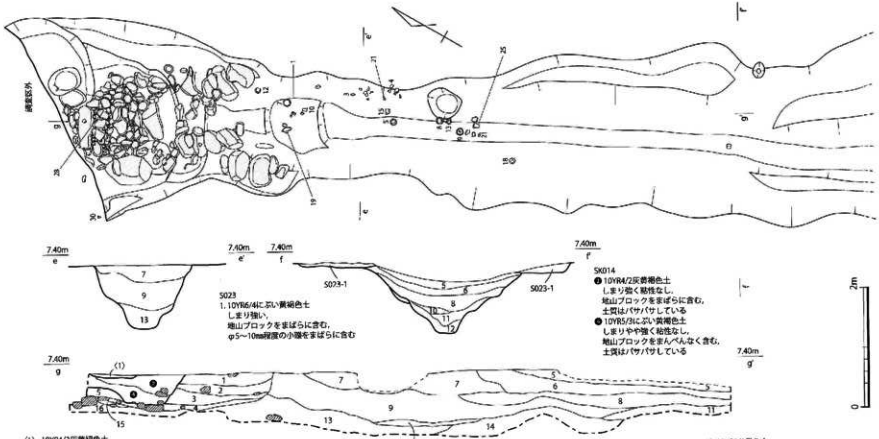
第6図　A区遺構配置図とグリッド番号（1/400）

古墳

第1号墳

調査区内では、墓道11m分と石室約2分の1が確認されている。中津市教委調査分も合わせてみると、中津市の「第2号溝状遺構」が第1号墳の周溝であった可能性が高く、そうすれば一辺十数mの方墳になる。主体部は単室の横穴式石室であるが、大きく上部から盗掘を受けており、玄室内の敷石、玄室の側石の一部、袖部の一部が残されているのみである。

石室は一辺1.5mのほぼ方形を呈し、礫石を使わずにやや大きめの石を積み上げた構造と考えられる。裾石と考えられる石から外側（墓道側）は約2mにわたって直線から「ハ」字状に開く石積みが見られた。石積みは概



第7図 A区第1号墳 (1/60)

(1) 10YR4/2灰黄褐色土
しまり強く粘性なし。
地山ブロック・小礫を微量含む。
土質はサクサクしている

第1号墳

1. 10YR3/2黒褐色土
しまりやや強く粘性なし。
褐色ブロックを少量含む。
焼土ブロックを微量含む。
角礫を含む。
砂子が細かく土質はサクサクしている

2. 10YR4/2灰黄褐色土
しまり強く粘性なし。
地山ブロックをまんべんなく含む。
焼土粒を微量含む。
土質は硬く、硬化している

3. 10YR3/1黒褐色土
しまりやや弱く粘性なし。
φ2～5mm程度の地山ブロックをまばらに含む。
大角礫3個を含む

4. 10YR2/1黒色土
しまり強く粘性なし。
φ2～10mm程度の地山ブロックをまんべんなく含む

5. 7.5YR5/3に ぶい褐色土
しまりやや強く粘性なし。
地山ブロック・小礫をまばらに含む

6. 10YR4/2灰黄褐色土
しまりやや強く粘性弱い。
地山ブロックをまばらに含む

7. 10YR4/4褐色土
しまりやや強く粘性弱い。
地山ブロックをまばらに含む。
土質はサラサラしている。
須恵器片がまばらに出土

8. 10YR5/3に ぶい黄褐色土
しまりやや強く粘性やや弱い。
地山ブロックをまんべんなく含む。
須恵器片がまばらに出土

9. 10YR3/1黒褐色土
しまりやや強く粘性やや強い。
地山ブロック・焼土ブロックを微量含む。
須恵器片が多量に出土

10. 10YR3/2黒褐色土
しまり弱く粘性やや強い。
地山ブロックをまんべんなく含む。
細礫を微量含む

11. 10YR5/4に ぶい黄褐色土
しまり強く粘性なし。
地山ブロックをまばらに含む。
土質はポソポソしている。
土師器片が多量に出土

12. 10YR5/6黄褐色土
しまり強く粘性弱い。
地山ブロックを多量に含み硬化している。
炭化物粒を微量含む

13. 10YR2/1黒色土
しまりやや強く粘性強い。
地山ブロックを微量含む

14. 10YR4/1に ぶい黄褐色土
しまり強く粘性やや強い。
地山ブロックをまばらに含む。
粗礫を微量含む。
土質はポソポソしている

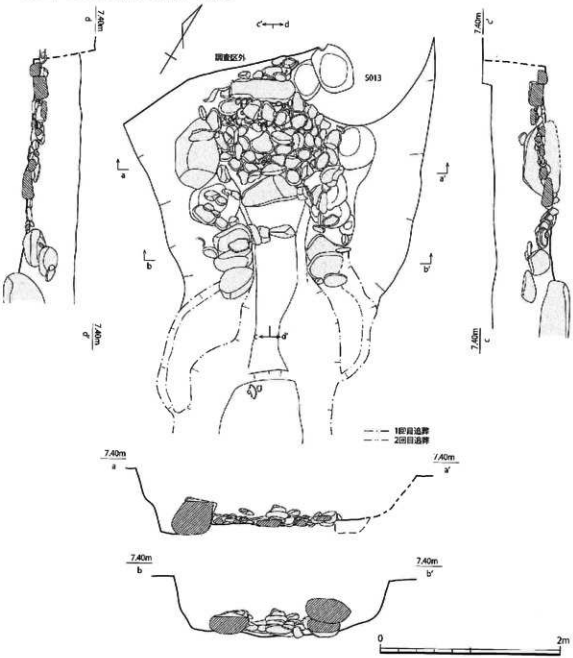
15. 10YR4/3に ぶい黄褐色土
しまりやや強く粘性なし。
地山ブロック・小礫をまばらに含む

16. 10YR5/4に ぶい黄褐色土
しまり強く粘性なし。
地山ブロックをまんべんなく含む。
φ10mm程度の黒色ブロックをまばらに含む

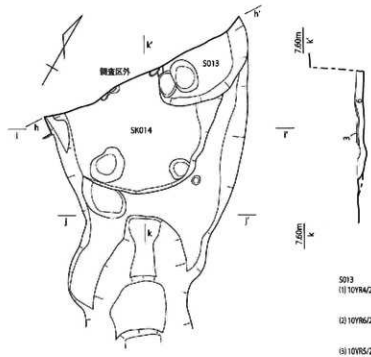
ね2段残されていた。この部分は、本来天井部があれば検討とすべき部分であるが、後述するように追葬に伴うと考えられる掘り込みが上部から確認されたことから、この2mあまりの部分は当初から天井部が無く、埋葬が終われば埋められた、または埋まった状態であったことが想定できる。また、石室の天井と思われる石は確認できなかった。

墓道は、玄室の棚石の外側から測って11.5m延び、急壁で切れて終わっている。本来はもう少し南に延びて緩やかに海の方に下っていたものと考えられる。幅は1.5～2.5mで、深さは1.0m前後である。床面を見ると、2mあまりの石積みが終わった部分で約5cmの段差が付き、さらに0.8mの平場を作ってさらに10cmの段差が付き、あとは南に向かって徐々に床面が下がっていく。

遺物は、玄室内と墓道から出土している。

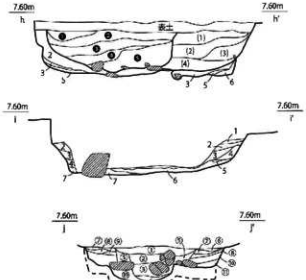


第8図　A区第1号墳主体部（1/40）

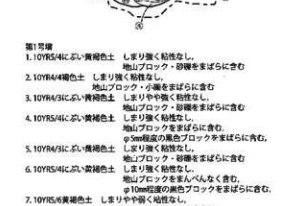


SK014
- 10YR5/2灰黄褐色土　しまり強く粘性なし。土質はサクサクしている
- 10YR4/2灰黄褐色土　しまり強く粘性なし。地山ブロックをまばらに含む。土質はパサパサしている
- 10YR6/2灰黄褐色土　しまりやや弱く粘性なし。角礫を多量に含む
- 10YR5/3にぶい黄褐色土　しまりやや強く粘性なし。地山ブロックをまんべんなく含む。土質はパサパサしている
- 10YR3/3暗褐色土　しまりやや強く粘性やや強い。地山ブロックをまばらに含む

SD13
(1) 10YR4/2灰黄褐色土　しまり強く粘性なし。地山ブロック・小礫を微量含む。土質はサクサクしている
(2) 10YR6/2灰黄褐色土　しまり強く粘性なし。小礫を多量含む。土質はパサパサしている
(3) 10YR5/2灰黄褐色土　しまりやや弱く粘性なし。小礫をまんべんなく含む
(4) 10YR5/4にぶい黄褐色土　しまりやや強く粘性なし。地山ブロックをまばらに含む



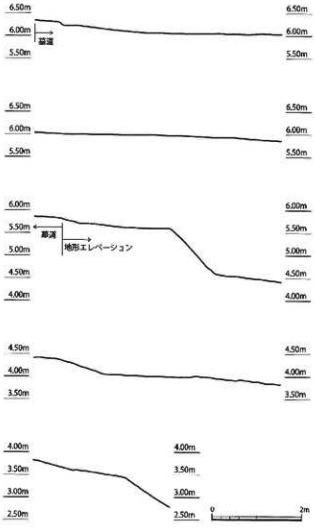
前庭部
① 10YR3/2黒褐色土　しまりやや強く粘性なし。焼土ブロックを含む。焼土ブロックを微量含む。角礫を含む。粒子が細かく土質はサクサクしている
② 10YR4/2灰黄褐色土　しまり強く粘性なし。地山ブロックをまんべんなく含む。焼土ブロックを微量含む。土質は硬く、硬化している
③ 10YR3/1黒褐色土　しまりやや弱く粘性なし。φ2~5mm程度の地山ブロックをまばらに含む。大円礫を3個含む。土質はサクサクしている
④ 10YR2/1黒色土　しまり強く粘性なし。φ2~10mm程度の地山ブロックをまんべんなく含む
⑤ 10YR4/2灰黄褐色土　しまりやや強く粘性なし。φ3mm程度の地山ブロックをまばらに含む
⑥ 10YR5/4にぶい黄褐色土　しまり強く粘性なし。地山ブロックをまんべんなく含む。φ1~2mm程度の黒褐色（10YR3/1）ブロックを微量含む。
⑦ 10YR3/1黒褐色土　しまり強く粘性なし。φ2~3mm程度の地山ブロックを微量含む
⑧ 10YR5/3にぶい黄褐色土　しまり強く粘性なし。地山ブロックをまんべんなく含む。φ2~3mm程度の黒褐色ブロックをまばらに含む。小礫を微量含む
⑨ 10YR4/2灰黄褐色土　しまり強く粘性なし。地山ブロックをやや多含む
⑩ 10YR5/4にぶい黄褐色土　しまり強く粘性なし。地山ブロックをまんべんなく含む。小礫をまばらに含む
⑪ 10YR3/1黒褐色土　しまり強く粘性なし。黒褐色と地山ブロックの混土層。小礫をまばらに含む



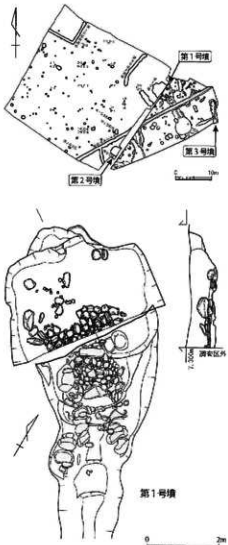
第1号墳
1. 10YR5/4にぶい黄褐色土　しまり強く粘性なし。地山ブロック・砂礫をまばらに含む
2. 10YR4/4褐色土　しまり強く粘性なし。地山ブロック・小礫をまばらに含む
3. 10YR4/3にぶい黄褐色土　しまりやや強く粘性なし。地山ブロック・砂礫をまばらに含む
4. 10YR5/4にぶい黄褐色土　しまり強く粘性なし。地山ブロックをまばらに含む。φ5mm程度の黒色ブロックをまばらに含む。
5. 10YR4/3にぶい黄褐色土　しまり強く粘性なし。地山ブロック・砂礫をまばらに含む
6. 10YR5/4にぶい黄褐色土　しまり強く粘性なし。地山ブロックをまんべんなく含む。φ10mm程度の黒色ブロックをまばらに含む。
7. 10YR5/6黄褐色土　しまりやや弱く粘性なし。地山ブロックをまんべんなく含む

0　2m

第９図　Ａ区第１号墳主体部土層（1/60）

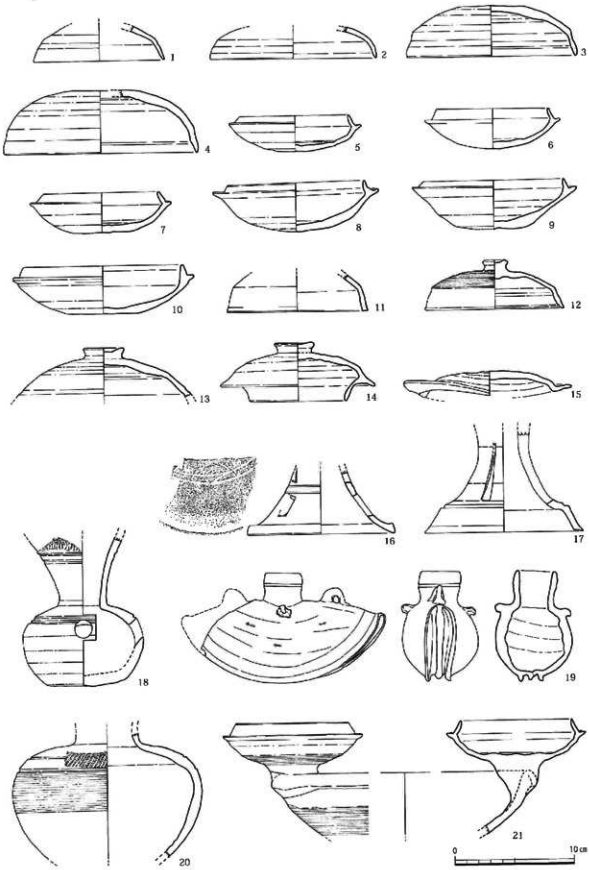


第10図　A区第1号墳エレベーション図（1/80）

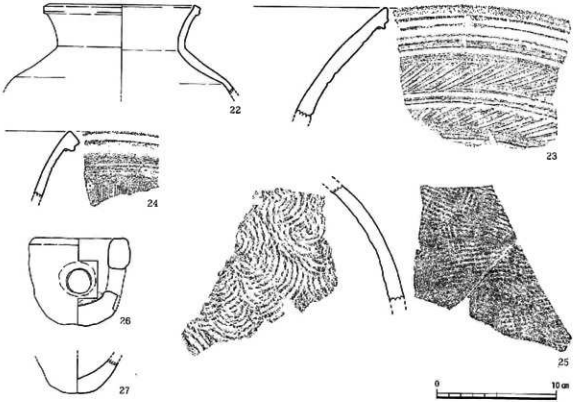


第11図　中津市教委調査区との合成図（1/1000・1/100）

出土遺物は第12図1～第13図27である。1～25は須恵器である。1～4は坏蓋。5～10は坏身。7と8は、底部にヘラ切りの痕跡が残る。9は、直線的な体部をもち、底部は平らでヘラ切りの痕跡が残る。10は体部に丸みをもつが、底部にヘラ切りの痕跡が残り平らである。11は高坏蓋。12は高坏蓋。体部上位にカキメと一条の沈線を施す。13は高坏蓋。14は壺蓋。15は壺。ほぼ平らな天井部をもち、下位で屈曲して鍔状を呈するが、返しなどはない。焼き歪みがある。16は高坏脚部。ほぼ同じ器厚でゆるやかに外湾しながら下方向にのびる。端部は外側に面をなし、三角形を呈する。2条の沈線を挟んで上下にスカシをもち、下段のスカシは方形を呈する。17は高坏脚部。ゆるやかに外湾しながら下方向にのび、下位で屈曲して稜を作り、端部に向かって直線的にのびる。端部は内側に面をもつ。三角形を呈する一段のスカシを三方向にもつ。18は須恵器壺。口縁部は外傾しながら直線的にのびる。二条の沈線の上部に縦方向の櫛描文を施す。胴部は丸く、上位に二条の沈線がある。底部は平らで、ヘラ切りの痕跡が残る。19は須恵器提瓶。皮袋形須恵器であろう。受け部をもつ坏を逆さにして折り畳んだような形である。実際に、内面は回転ヨコナデ、外面は横方向の静止ヘラケズリで調整されており、断面には底部を貼り合わせた痕跡が観察できる。4カ所に把手がつくが、長辺上の2カ所は環状を呈するが、短辺上の2カ所は突出部のみである。20は長頸壺。胴部は丸く、中位にカキメを施す。肩部に2条の沈線があり、その間に連続する斜方向の刺突文がある。21は子持ち器台。装飾の坏は口縁端部が直線的に内傾し、底部は浅い。



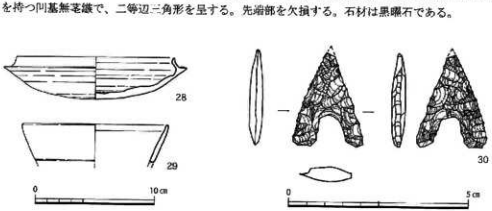
第12図　A区第1号墳出土遺物1（1/3）



第 13 図　A 区第 1 号墳出土遺物 2 (1/3)

体部下半にカキメを施す。器台も口縁部下位にカキメを施す。口縁部は内湾しながらのび、端部を折り曲げて面をなす。破片 2 点が墓道中で見つかったが、ほかに接合する資料はなく全体形は不明である。おそらく 2 カ所以上の装飾部が付くと考えられる。22 ～ 25 は甕。26・27 は蛸壺。

第 1 号墳の主体部を切る SK014（第 9 図）からは、第 14 図 28 ～ 30 が出土した。28 は須恵器坏身。口縁端部は内傾してのび、端部がわずかに外反する。底部は丸みを帯び、浅い。外面は最終調整を行っておらず、ヘラ切りの痕跡が残る。29 は須恵器高坏坏部。口縁部は直線的にのびる。体部に沈線が確認できる。30 は石鏃。基部に抉りを持つ凹基無茎鏃で、二等辺三角形を呈する。先端部を欠損する。石材は黒曜石である。



第 14 図　A 区 SK014 出土遺物（土器：1/3・石器：1/1）

第3号墳

調査区の東端で確認されたもので、古墳主体部の頭方と墓道の一部しか残されていなかった。

主体部は、石室を構成した側石の抜き取り痕が十数カ所確認されているので、本来は横穴式石室であったと考えられる。石室堀方は奥壁側が広く玄門側が狭い「羽子板」形を呈し、羨道との区別は明確ではない。墓道は約3m確認されている。

玄室は、堀方の長さ3.0mで奥壁側の幅1.9m、玄門側1.2mであるが、側石の抜き取り痕からすると、幅0.6mで長さ2.6mの長方形に復原できる。

墓道は幅0.7mで、深さは0.4～0.8mである。

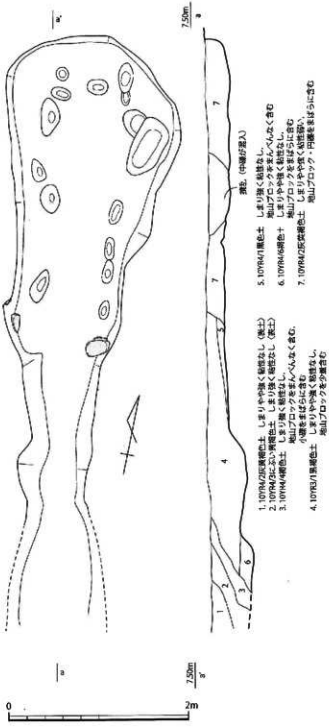
出土遺物は第16図31で、須恵器高坏の蓋である。天井部はつまみをもち、外面に丁寧なカキ目が施される。断面にはつまみの貼り付け痕跡が確認できる。

溝

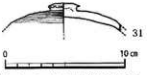
SD016

調査区を東西に貫く溝である。ほぼ直線で、幅1.0m前後、深さは0.4m～0.5mである。第1号墳の墓道を切っている。出土遺物の多くは第1号墳の墓道を壊した際に混入したものと考えられる。

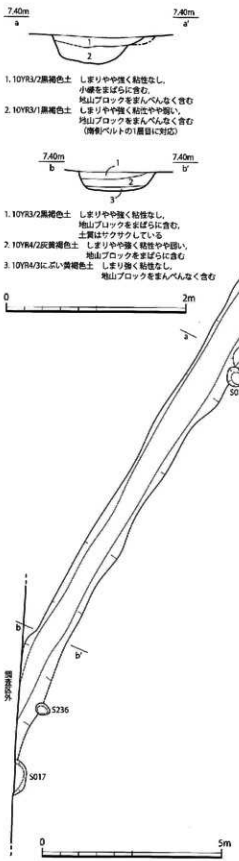
出土遺物は第18図32～第19図44で、すべて須恵器である。32は坏蓋。器厚はやや厚く、そのまま内湾して下方向にのび、端部は尖り気味である。33は坏身。底部は平らで、浅い。内湾しながら上方向にのびロ縁部はやや外開する。34は坏身の口縁部。35は高坏蓋のつまみ。36～41は高坏脚部。36は、ほぼ同じ器厚でゆるやかに外開しながら下方向にのびる。2条の沈線を挟んで上下にスカシをもち、下段のスカシは方形を呈する。37は、ほぼ直線的に下方向にのびる。坏部の直下にスカシをもつ。38と39はともにほぼ直線的に下方向にのびる。2条の沈線を挟んで上下にスカシをもつ。38の下段のスカシは方形を呈する。40と41はともに、緩やかに広がる脚部端部が外側に面をなし、三角形を呈する。下位に2条の幅の広い沈線がある。41は沈線の上部にスカシをもつ。42は脚部。43は焼ロ縁部。外傾してのび端部は面をなす。44は壺胴部。



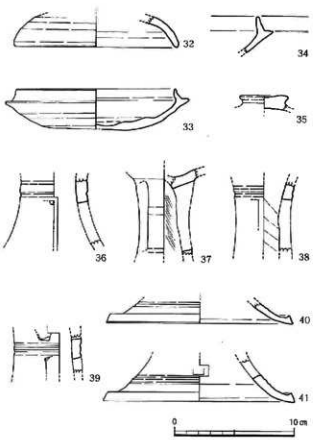
第15図　A区第3号墳（1/40）



第16図　A区第3号墳出土遺物（1/3）



第 17 図　A 区 SD016 (1/100・1/40)



第 18 図　A 区 SD016 出土遺物 1 (1/3)

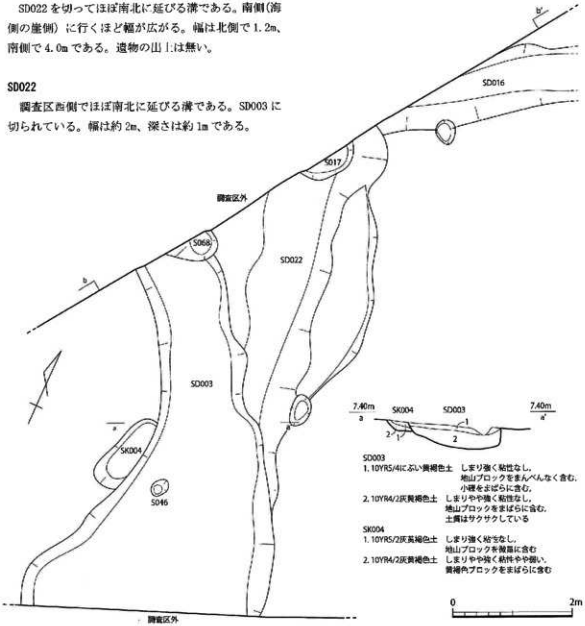
第19図　A区SD016出土遺物2（1/3）

SD003・SK004

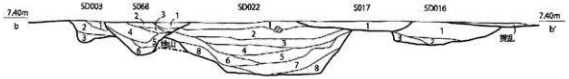
SD022を切ってほぼ南北に延びる溝である。南側(海側の崖側）に行くほど幅が広がる。幅は北側で1.2m、南側で4.0mである。遺物の出土は無い。

SD022

調査区西側でほぼ南北に延びる溝である。SD003に切られている。幅は約2m、深さは約1mである。



第20図　A区SD003・SK004・SD022（1/60）



SD003
1. 10YR5/4にぶい黄褐色土　しまりやや強く粘性なし。
小礫をまばらに含む。
地山ブロックをまんべんなく含む
2. 10YR4/2灰黄褐色土　しまりやや強く粘性なし。
地山ブロックをまばらに含む。
土質はサクサクしている
3. 10YR4/3にぶい黄褐色土　しまりやや強く粘性なし。
細礫を微量含む。
地山ブロックをまんべんなく含む

SD016
1. 10YR3/2黒褐色土　しまりやや強く粘性なし。
小礫をまばらに含む。
地山ブロックをまんべんなく含む
2. 10YR3/1黒褐色土　しまりやや強く粘性やや弱い。
地山ブロックをまんべんなく含む

SD022
1. 10YR5/4にぶい黄褐色土　しまりやや強く粘性やや弱い。
地山ブロックをまんべんなく含む
2. 10YR5/3にぶい黄褐色土　しまりやや強く粘性やや弱い。
中礫・地山ブロックををまばらに含む。
土質はボソボソしている
3. 7.5YR5/6明褐色土　しまりやや強く粘性やや弱い。
小礫をまばらに含む。
地山ブロックをまんべんなく含む
4. 10YR4/3にぶい黄褐色土　しまりやや強く粘性やや強い。
φ1cm程度の黄褐色（10YR5/6）ブロックをまんべんなく含む
5. 10YR4/2灰黄褐色土　しまり弱く粘性強い。
φ1cm程度の黄褐色（10YR5/6）ブロックをまんべんなく含む（4層より多い）
6. 10YR5/6黄褐色土　しまりやや強く粘性強い。
φ1cm程度の灰黄褐色（10YR4/2）ブロックをまばらに含む。
細礫を微量含む
7. 10YR3/2黒褐色土　しまり弱く粘性非常に強い。
φ1cm程度の灰黄褐色（10YR4/2）ブロックをまばらに含む
8. 10YR6/6黄褐色土　しまりやや強く粘性やや強い。
地山ブロックをまんべんなく含む。
φ5mm程度の小礫をまばらに含む

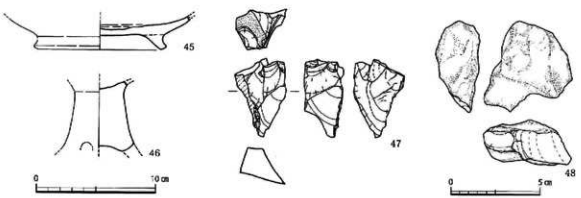
SD017
1. 10YR5/4にぶい黄褐色土　しまりやや強く粘性なし。
地山ブロックをまんべんなく含む。
土質はボソボソしている

SD068
1. 10YR4/3にぶい黄褐色土　しまりやや強く粘性なし。
小礫をまばらに含む。
地山ブロックをまんべんなく含む
2. 10YR6/6明黄褐色土　しまりやや強く粘性なし。
地山ブロックをまんべんなく含む
3. 10YR4/4褐色土　しまり強く粘性なし。
地山ブロックをまばらに含む。
土質はサクサクしている
4. 10YR4/2灰黄褐色土　しまりやや強く粘性やや弱い。
明黄褐色（10YR6/6）ブロックをまばらに含む。
細礫をまばらに含む。
土質はサクサクしている
5. 10YR4/6褐色土　しまりやや強く粘性弱い。
地山ブロックをまんべんなく含む
6. 10YR3/2褐色土　しまりやや弱く粘性なし。
地山ブロックをまばらに含む

0　2m

第 21 図　A 区 SD003・SD022 ほか土層（1/60）

出土遺物は第 22 図 45～48 である。45 は大型の土師器高台付椀。7 世紀後半であろう。46 は土師器高杯の脚部。古墳時代前期の所産である。47・48 は旧石器。本章末の旧石器遺物の項で詳細を述べる。

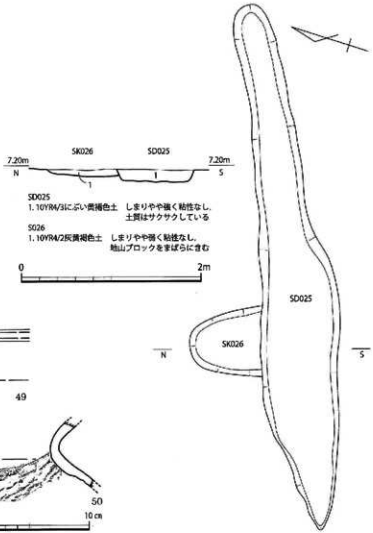


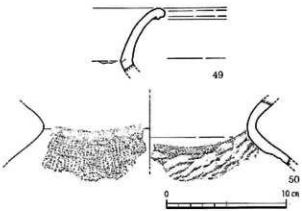
第 22 図　A 区 SD022 出土遺物（土器：1/3・石器：1/2）

SD025

第3号墳の墓道を切って略東西方向に延びる溝である。幅は0.5～0.9m、長さは5.9m、深さは約20cmである。

出土遺物は第24図**49**と**50**である。**49**は須恵器甕口縁部で、頸部からゆるく外湾する。端部は肥厚して丸みを帯び外側に面をもつ。**50**は須恵器甕頸部で、内面は同心円タタキ、外面はタタキである。





第24図　A区SD025出土遺物（1/3）

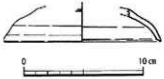
第23図　A区SD025・SK026（1/40）

土坑

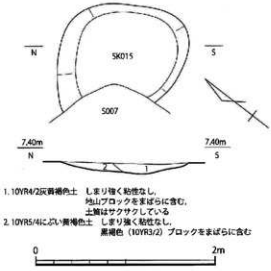
SK015

調査区南側で確認された土坑である。西側は別遺構に切られているが、南北1.4m、東西1.6m、深さ15cmほどの皿状を呈する。

出土遺物は第26図51で、須恵器坏蓋である。天井部を欠損するが、わずかにカキメが観察できる。体部はヨコナデで、内湾気味に口縁部がのびる。端部は内側にかえりを持つ。



第26図　A区SK015出土遺物（1/3）



第25図　A区SK015（1/40）

（2）B区

古墳時代当時、海に向かって延びていた岬状の丘陵突端に近いA区から、内陸方面（南側）に約300m入った場所にあるのがB区である。B区も、現在は東側が埋め立てられて工場が立地しているが、明治時代までは海であった。つまり、B区は東に海を望む海岸段丘の端に位置することになる。

このB区は2カ年にわたって4地区で調査されているので、それぞれB1区～B4区とする（第5図）。遺構は、B2区とB3区、B4区で古墳（石室のみ、あるいは墓道のみのものも含む）18基を検出し、その他溝が調査されている。

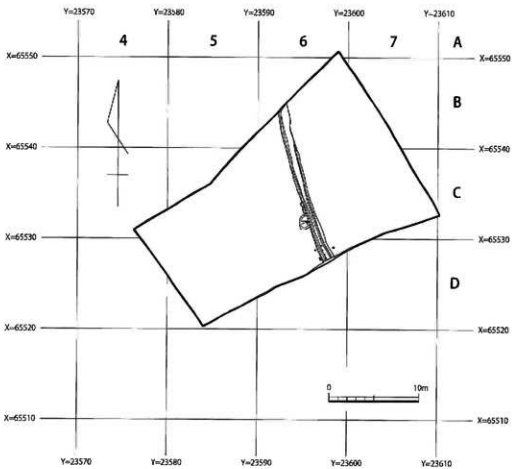
B1区は崖面より内側に約60m入った地点で、南北方向に延びる溝が1条確認されたのみである。

B2区は、現在の崖面に接する地区で、危険防止から実際は2m近く控えて調査している。崖面から延びる墓道を持つ古墳が散在する。調査区北側3分の1程度は、後世の土取り（粘土採掘か）によって大きく削られており、古墳があったとしても確認できない。

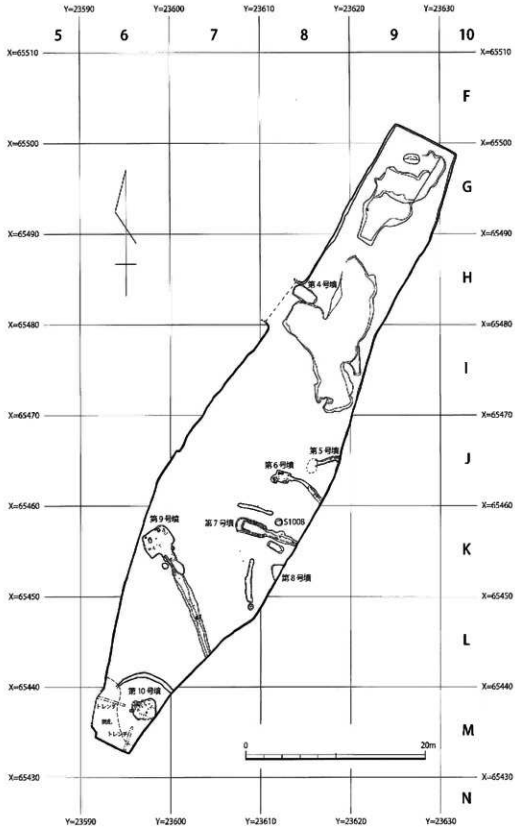
B3区は、B2区と市道を挟んで西側に位置し、調査区南側は崖面に接する。主に調査区東側に沿って古墳が確認されている。

B4区はB3区の南側部分で、古墳が1基確認されている。

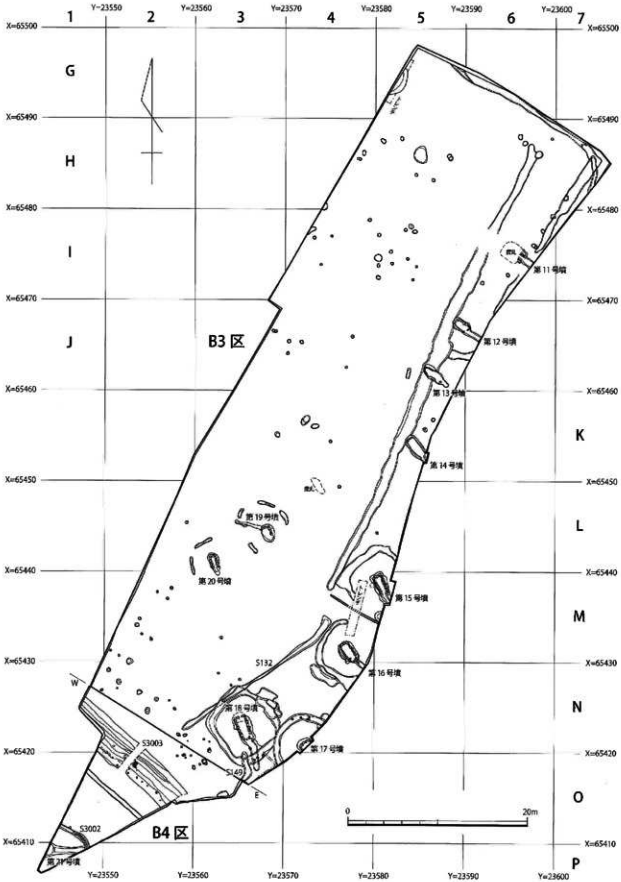
B3区とB4区の境の土層が第30図である。1層と2層は近代から現代の表土層で、その下の3層と4層は洪水に伴うと考えられる砂層で、無遺物層である。5層は黒褐色を呈し、旧石器を包含する。この層の広がりはB3区南側に限られる。その他の地点ではその下の地山（黄褐色土）が遺構検出面になる。



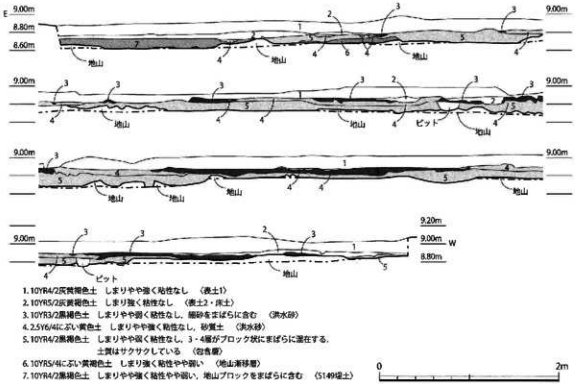
第27図　B1区遺構配置図とグリッド番号（1/400）



第 28 図　B2 区遺構配置図とグリッド番号（1/400）



第29図　B3・B4区遺構配置図とグリッド番号（1/400）



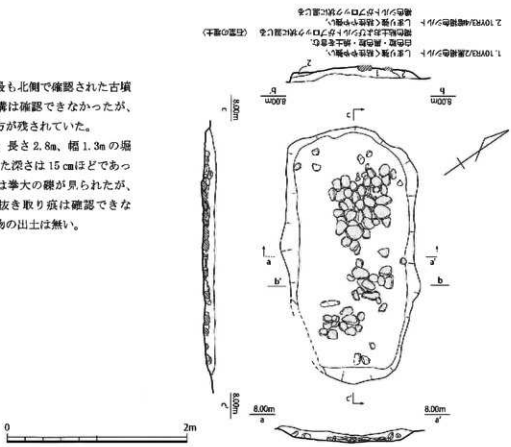
第 30 図　B3 区南壁土層（1/40）

古墳

第 4 号墳

B 区では最も北側で確認された古墳である。周溝は確認できなかったが、主体部の堀方が残されていた。

主体部は、長さ 2.8m、幅 1.3m の堀方で、残された深さは 15 cmほどであった。床面には拳大の礫が見られたが、側石などの抜き取り痕は確認できなかった。遺物の出土は無い。



第 31 図　B2 区第 4 号墳（1/40）

第５号墳

主体部は攪乱で確認できなかったが、墓道と思われる溝が確認されたので、古墳として扱う。

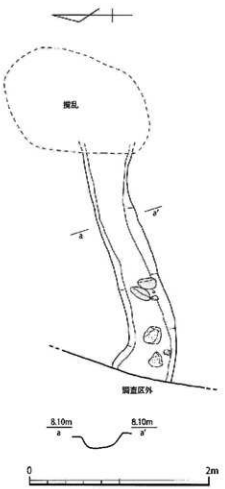
墓道は、幅約 1m で、長さは 2.5m 確認された。深さは 15 cmほどで、遺物の出土は無い。

第６号墳

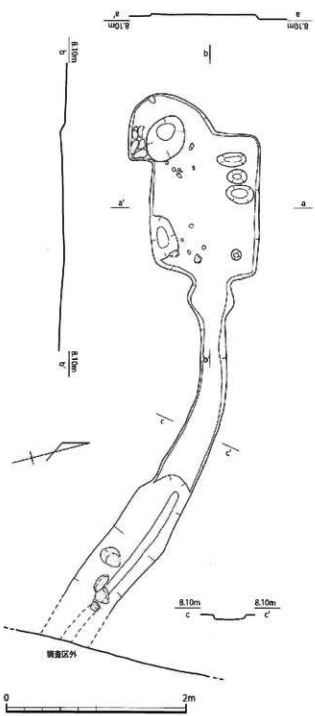
主体部の掘方と墓道が確認された古墳である。

主体部は、2.6m × 1.2m の長方形の掘方で、側 *G*の抜き取り痕と思われる穴が北側に３個並んでいる。南西コーナー部は、他遺構との切り合いと考えられるが、先後関係は確認できなかった。床面には礫を敷いた痕跡は確認できなかった。

墓道は、石室掘方の東側一辺のやや北寄りから東側に向けて延びる。幅は 0.3 ～ 0.4m で、深さは数cmしか残っていない。さらに調査区外に延びる部分は一段深くなっており、掘り直しの可能性がある。主体部、墓道とも遺物の出土は無い。



第 32 図　B2 区第５号墳（1/40）



第 33 図　B2 区第６号墳（1/40）

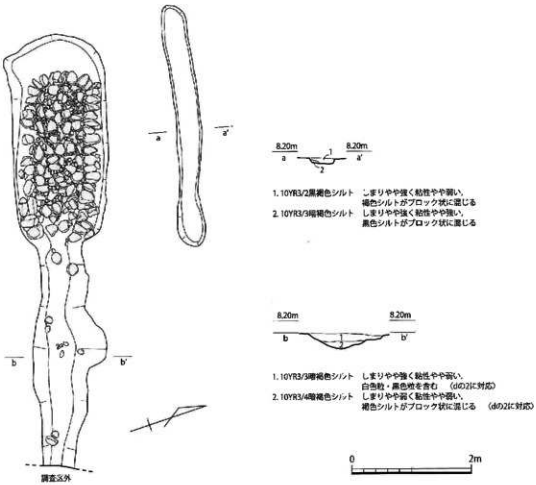
第 7 号墳

調査区の中央やや南寄りで確認された古墳である。周溝と思われる溝が北側で確認されているが、企画せず規模は不明である。形状は方墳である。

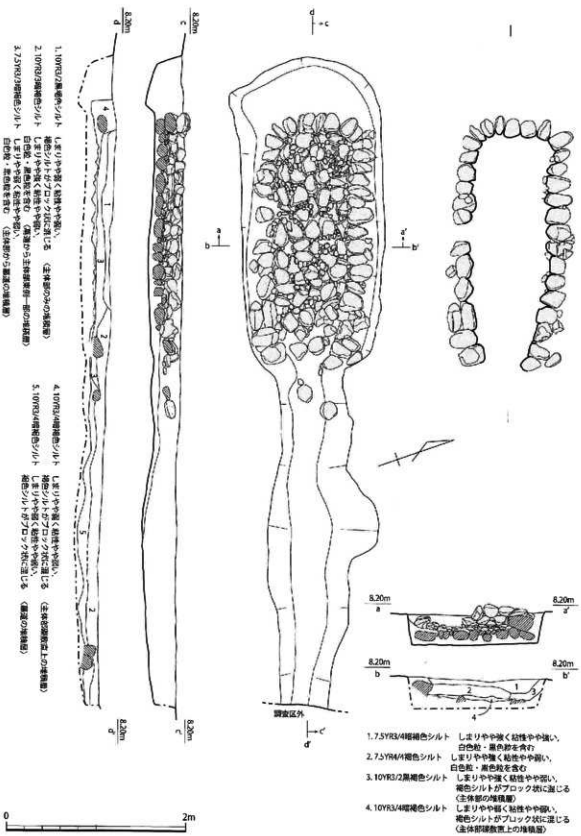
上体部は奥壁側と側壁側とも、側石がほぼ二段分残存している。それによると、僅かに胴張りを呈する、東西2.5m、南北0.8mの長方形である。奥壁にも鏡石を使った形跡は無く、いずれも人頭大の川原石を積み上げるのみである。床面は、人頭大の礫を敷いた間に挙大の礫を詰めている。

人口部は、袖石等は無いが、僅かに羨道部分との間に数cmの段差を造り、また、羨道部から墓道にかけては緩やかな下り勾配をつけている。おそらく、玄室－羨道－墓道という区別があったものと思われる。

玄室、墓道とも遺物の出土は無い。



第 34 図　B2 区第 7 号墳（1/60）



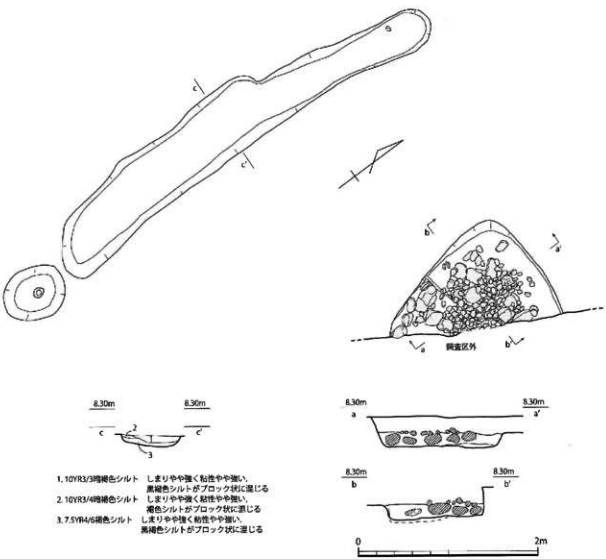
第 35 図　B2 区第 7 号墳主体部（1/40）

第８号墳

調査区南東で確認された古墳である。主体部の２分の１以上は調査区外であるが、外側 1m ほどですぐ崖となることから、既に大半は削平されていると考えられる。周溝と思われる直線的な溝が長さ 5m 確認されていることから、方墳であった可能性が高い。

主体部は、奥壁側と思われる南北方向が 1.8m、東西方向は 1.3m 確認されている。深さは約 15 cm残っていた。床面には人頭大の川原石の間に拳大の礫が敷かれていた。しかし、側壁を構成する礫は全て抜き取られていた。遺物の出土は無い。

周溝は、幅 0.5 ～ 0.7m、深さ 10 cm程度で、長さは 5.0m である。主体部の奥壁側にほぼ南北方向に直線的に延びている。周溝からの遺物の出土は無かった。



第 36 図　B2 区第８号墳（1/40）

第9号墳

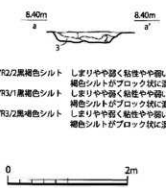
調査区の南寄りで確認された、長大な墓道を持つ古墳である。主体部も含めた長さは15.3mとなる。今回調査した古墳の中では最も長い。

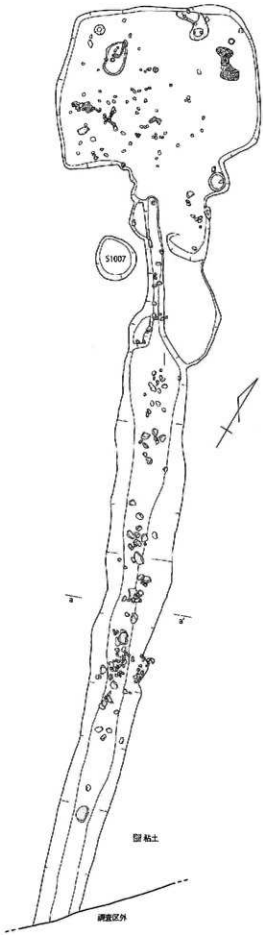
主体部は路南北（奥行）2.4m、路東西（幅）3.5mと横に長い長方形を呈する。深さは10m程度と掘方の最下面しか残っておらず、石の抜き取り痕と考えられる僅かな窪みが外周に沿って確認されたのみである。しかし、白色粘土が広く散在しており、天井部あるいは側壁部に目張り等が施されていた可能性が考えられる。

玄室と墓道の間には、一端細くなった部分が2.4mあり、羨道部とすることが出来る。しかし、この部分は若干攪乱が入っており正確な形状は不明であるが、西寄りには排水溝と考えられる幅20cm、深さ数cmの溝が延びている。

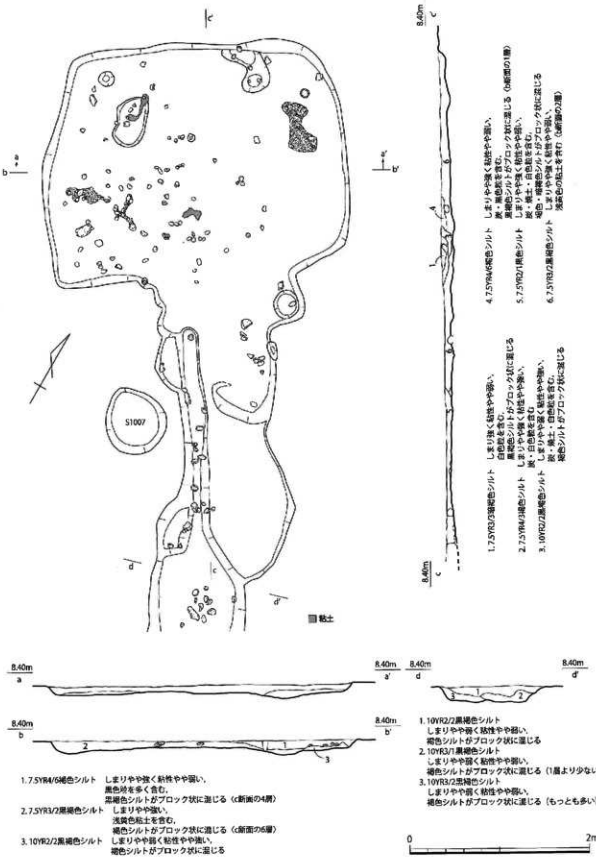
墓道は羨門部から南へ約10mとなるが、更に調査区外に繋がる。僅かに玄室に対して西側に振れている。幅は0.8～1.1mで、深さは20cm程度である。周溝からは破砕された状態で須恵器壺等が出土している。

出土遺物は第39図52～57である。52は須恵器平瓶の頸部。口縁部は、肥厚しながら直線的に上方向にのびる。体部にはカキメを施す。53は須恵器平瓶の体部下半。体部中位でもっとも肥厚が薄くなり、肥厚しながら緩やかに底部にむかう。体部にはカキメを施すが、底部に近い部分はヘラケズリのみである。54と55は須恵器甕の口縁部。56・57は土師石器である。本章末の旧石器遺物の項で詳細を述べる。

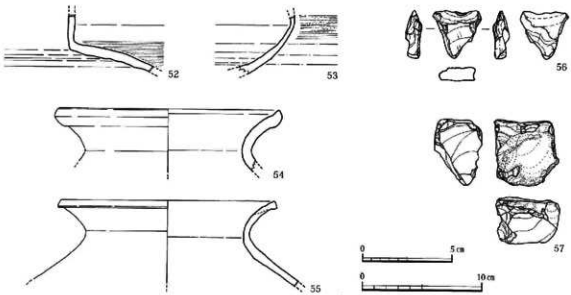




第37図　B2区第9号墳（1/60）



第 38 図　B2 区第 9 号墳主体部（1/40）



第39図　B2区第9号墳出土遺物（土器：1/3・石器：1/2）

第10号墳

調査区南端で確認された古墳である。主体部はほぼ全形が確認されたが、上部がほとんど削平を受け、内部も石が抜き取られた状況であった。主体部の北側に半円形状に廻る周溝が確認されたことから、直径が8m前後の円墳であることがわかった。

主体部は南北2.0m、東西2.5mで、残存する深さは20cmであった。入口部がどちらに開口していたのかはわからなかった。床面には、人頭大の礫と拳大の礫が散在しており、合間に第9号墳同様に白色粘土が残されていた。主体部が破壊された際に、石積みも床面も徹底的に破壊されたと考えられる。遺物の出土は無かった。

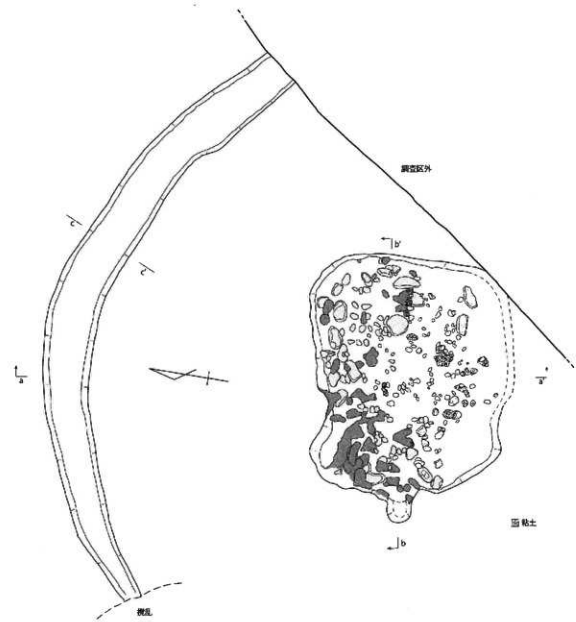
周溝は、幅0.4～0.55mで、深さは数cmしか残されていなかった。周溝からの遺物の出土は無かった。

第11号墳

調査区の北側で確認された古墳主体部である。西側は大きく削られており、玄室の一部と墓道が約1.2m確認されたのみである。

玄室は、東西（入口部幅）1.4mである。床面には人頭大の敷石が残っていた。しかし、明確に側石と考えられる石は無く、抜き取り痕が4カ所で確認された。奥行きは不明であるが、いずれにしても小規模な玄室であったと考えられる。遺物の出土は無い。

墓道は幅0.85m、深さ0.2mで、やや玄室内に掘り込む形で接続しているが、明確な羨門部を示す構造は確認できなかった。東側は調査区外に延びるが、すでに削平されていると考えられる。遺物の出土は無い。



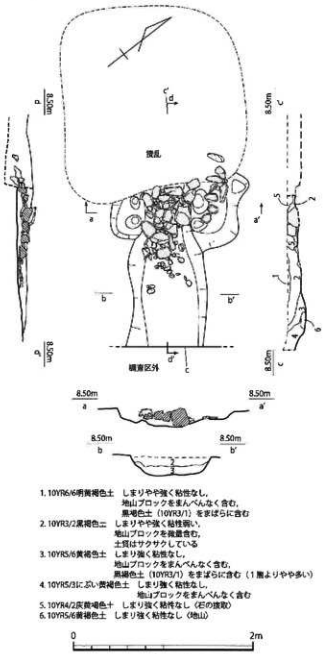
第 40 図　B2 区第 10 号墳（1/40）

第 12 号墳

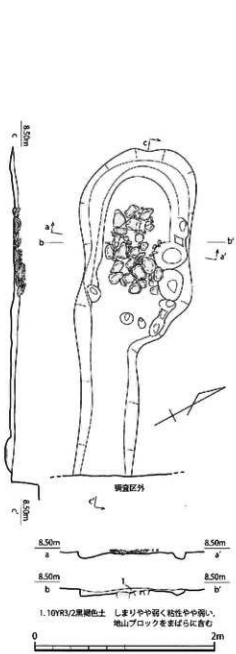
第 11 号墳に並ぶように検出された古墳主体部である。玄室からは東側に墓道が延びていた。

玄室は、掘方の幅 1.2m、長さ 2.0m の長方形である。側壁や奥壁の石積みは全て抜き取られているので、抜き取り痕から推測される玄室の大きさは、幅 0.7m、長さ 1.7m 程度となり、かなり小規模である。床面には、中央部付近にのみ礫敷きが残されていた。遺物の出土は無い。

墓道は、玄室の南側に沿って延びるので、いわゆる「片袖式」となる。墓道の幅は 0.7m、深さは 10 ～ 20 cm 程度である。遺物の出土は無い。



第 41 図　B3 区第 11 号墳（1/40）



第 42 図　B3 区第 12 号墳（1/40）

第 13 号墳

第 12 号墳に並ぶように検出された古墳主体部である。玄室からは東側に墓道が延びていた。

玄室は東壁側と側壁も全て石が抜き取られており、その痕跡が確認できた。それによると、長さ 1.2m、幅 0.7m ほどの小規模な石室となる。床面には一部人頭大の扁平な川原石が当初のまま残されていた。

遺物の出土は無い。

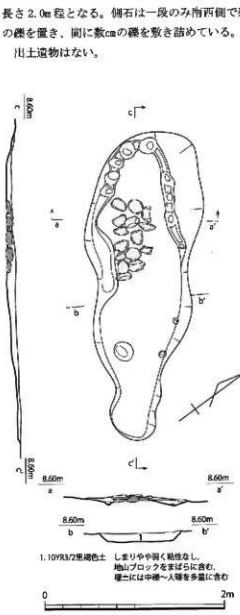
墓道との境もかなり改変を受けたと考えられ、その境や構造は不明瞭である。玄室の長さを 1.2m とすると、推測された墓道の長さは約 1.5m となる。深さは 10 cm程である。遺物の出土は無い。

第 14 号墳

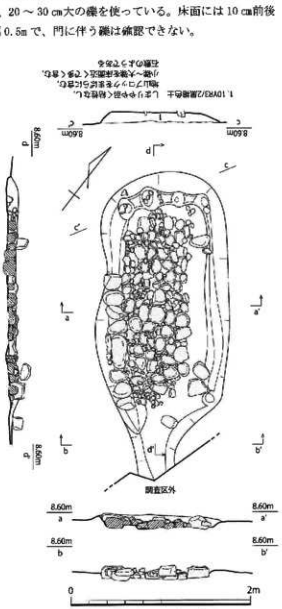
石室の堀方最下面がかろうじて残存し、敷石と側石の一部が残る。大部分の側石は抜かれており、抜き取り痕が溝状になっている。石室入口部は溝状になっており、調査区外に延びる。

石室の形状は、堀方で幅 1.4m、長さ 2.6m の長方形を呈する、実際の大きさは抜き取り痕の内側で測ると、幅 0.8m、長さ 2.0m 程となる。側石は一段のみ南西側で残っており、20 ～ 30 cm大の礫を使っている。床面には 10 cm前後の礫を置き、間に数cmの礫を敷き詰めている。入口部は幅 0.5m で、門に伴う礫は確認できない。

出土遺物はない。



第 43 図　B3 区第 13 号墳（1/40）



第 44 図　B3 区第 14 号墳（1/40）

第 15 号墳

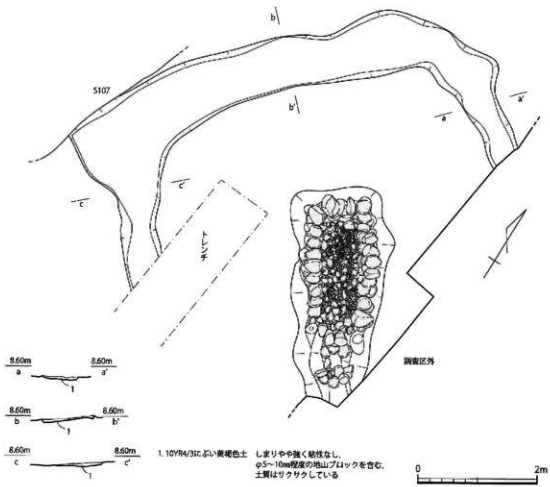
方形に廻る周溝が残る石室墳である。玄門から外側は調査区外となる。石室の側石は部分的に三段残っており、今回の調査では最も残りの良い石室である。

石室は、床面で幅 0.5m、長さ 1.8m の長方形である。奥壁と側壁ともに鏡石は使わずに、20 ～ 30 cm大の礫を乱積みしている。最も入口側の側石は左右とも抜かれており、袖石に相当する石は確認できない。床面の状況を見ると、奥壁から 1.6m が礫敷き部分の玄室、そこから 0.4m が羨道、更に約 10cm 上がって外側に延びる墓道、と捉えることが出来る。そうすると、羨道部と墓道上には閉塞石と考えられる礫が残されていた。それから考えると、入口部は羨門を礫で塞ぐものであったことがわかる。

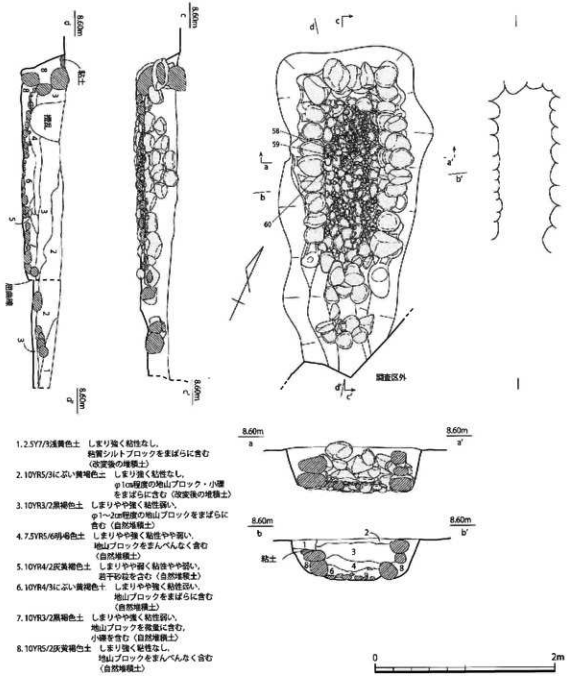
玄室床面は数cm～拳大の礫が敷き詰められていた。

玄室の周囲には、主体部とはやや主軸を異にする方形に廻る周溝が確認された。溝の幅は 0.6 ～ 0.9m で、深さは数cmしか残されておらず、南西側は消失していた。周溝の内法で測ると、この古墳は一辺 5.6m の方形墳とすることができる。

玄室の西側の側石際の床面上から遺物が出土している。

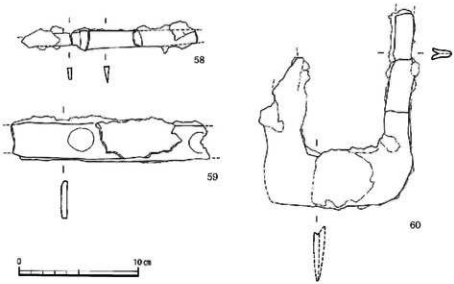


第 45 図　B3 区第 15 号墳（1/60）



第 46 図　B3 区第 15 号墳主体部（1/40）

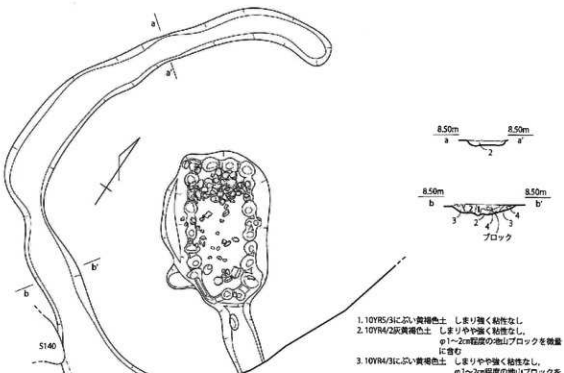
出土遺物は第 47 図 58 ～ 60 で、すべて鉄製である。58 は刀子の刃部片。59 は鉄鏃か。銹出が著しいため断面形態が明瞭でなく、刃部との断定はできない。また、破損面を観察すると、体部中央に径約 2 cm程度の穴が 2 カ所見て取れる。製作時のものかは不明であるが、もしそうであれば鉄鏃としての使用は無理であろう。剣などの茎にあけられる目釘穴にしては体部に比して大きく、穴の用途は不明である。60 はU字形鋤先。



第 47 図　B3 区第 15 号墳出土遺物（1/3）

第 16 号墳

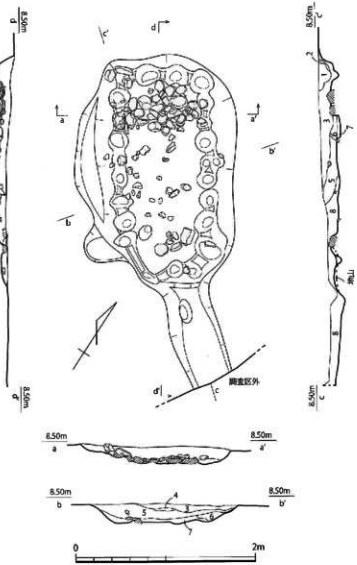
古墳の南側は一部調査区外になるが、ほぼ全体を確認できた。しかし、周溝は北東側で途切れて確認できなかった。



第 48 図　B3 区第 16 号墳（1/60）

主体部は、2.5m × 1.8m の掘方で、内部からは側壁や奥壁の最下段の石の抜き取り痕が検出された。その痕跡からすると、石室は長さ 2.0m、幅 0.8m の長方形となる。また、奥壁側の床面には、20 cm前後の礫が散かれており、本来全面に敷かれていたものが、入口側は床面の石も剥がされたのであろう。また、石室の南東コーナー付近からは幅約 0.6m、深さ約 15 cmの墓道が約 1m 延びる。墓道は石室に向かってやや下り、15 cmほど上がって石室内に入る。石室や墓道からの遺物の出土は無い。

周溝は、西側から南側にかけてL字形に検出されている。隅丸の方形であるので、第 16 号墳は方墳とすることができる。周溝の幅は 0.4 ～ 0.8m、深さは 10 cm程度である。南東側は別遺構との切り合いがあったと考えられるが、確認できなかった。遺物の出土は無い。



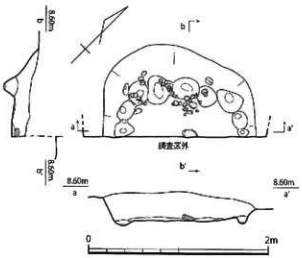
第 49 図　B3 区第 16 号墳主体部（1/40）

第17号墳

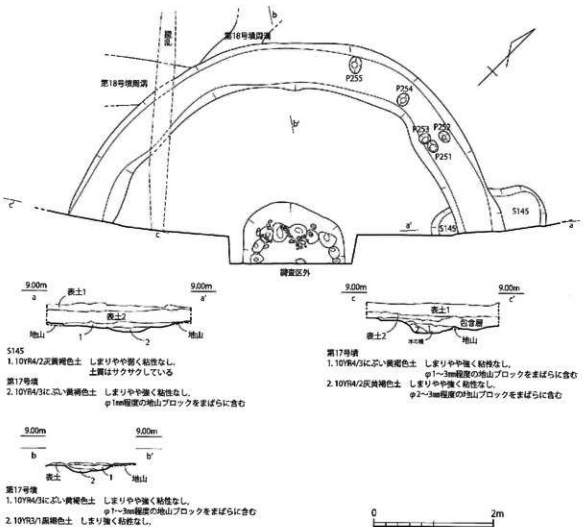
古墳の南東側約2分の1ほどが調査区外になり、多くは市道によって壊されたと思われる。

主体部は、奥壁側の一部が残されていたが、奥壁と側壁とも石は全て抜き取られていた。その痕跡を図51に示しているが、大きな鏡石を使うこと無く、人頭大の礫を使ったものと思われる。床面には拳大の礫が一部で見られることから、本来は全体に拳大の礫を敷いていたものと考えられる。遺物の出土は無い。

周溝は、幅0.6～0.8m、深さ0.1～0.2mで、ほぼ正円を描くように廻っている。そこから復原できる古墳の直径は、周溝内法で6.8mとなる。周溝からの出土遺物は無い。



第51図　B3区第17号墳主体部（1/40）

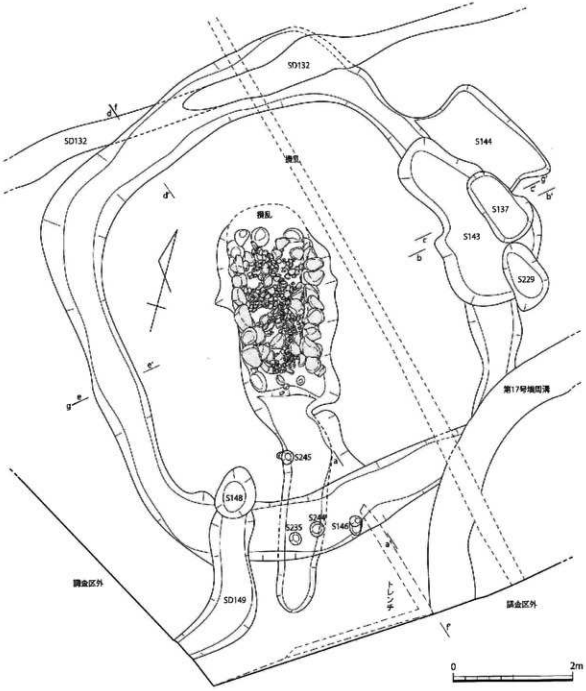


第50図　B3区第17号墳（1/60）

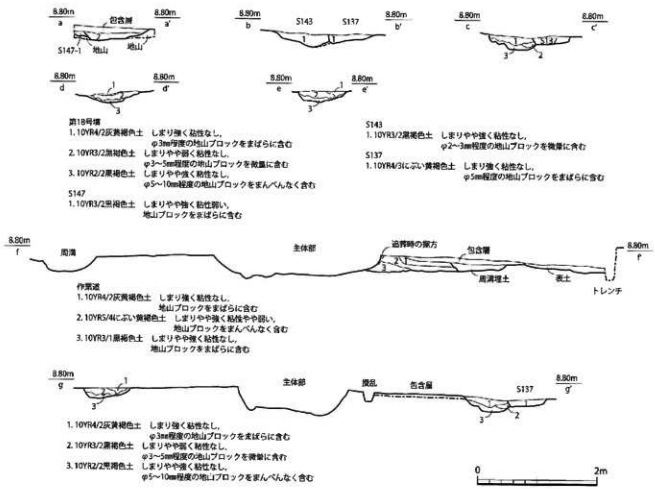
第18号墳

調査区の南端近くで確認された方墳で、周溝が唯一全周する形で残存していた。周溝内側で南北6.0m、東西5.5mのやや長方形を呈する方墳である。

石室は、奥壁部分が攪乱を受けているが、側壁部は二段ほどの礫積みが残っている。奥壁の抜き取り痕から推定すると、玄室は長さ2.0m、幅は奥壁側で1.0m、玄門側で0.7mの羽子板状を呈する。玄門部の状況は不明であるが、羨道部との間には約10cmの段差が付く。さらに、そこから0.8mのところで東側に屈曲するとともに、約10cmの段差が付いて立ち上がる。この0.8mの間を羨道部とすることが出来る。さらにそこから幅0.7mで深さ10cmの墓道状の溝が延びるが、周溝と切り合い関係（周溝が切っている）を有していることから、調査時には



第52図　B3区第18号墳（1/60）

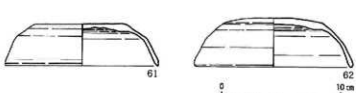


第 53 図　B3 区第 18 号墳土層（1/60）

石室構築時の作業道とも考えた。しかし、断面図（第 53 図）を見ると、石室内の塩土（2 層）が作業道の土層（6 層）を切っており、墓道の構築以前のなにらかの遺構と考えた方が良いと解釈できるので、墓道状のものは別遺構とする。石室床面はやや乱されており、石の無い部分もあるが、基本的に 20cm 前後の礫を敷き、間に拳大の礫を敷き詰めていたと考えられる。石室内からの遺物の出土は無い。

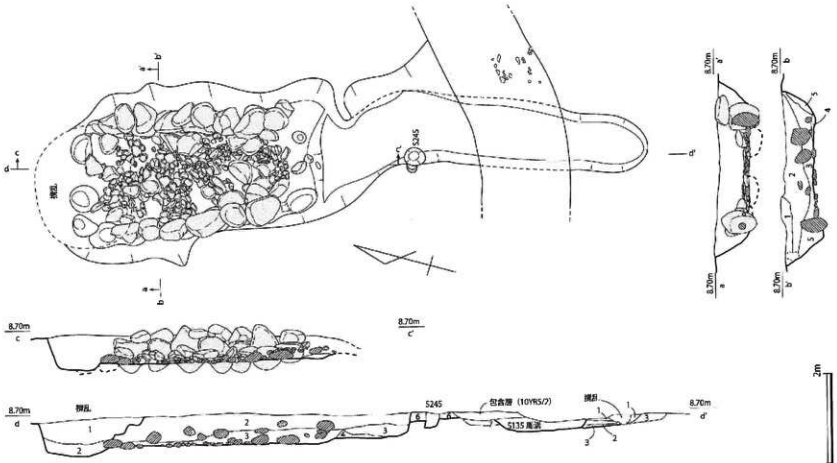
周溝は、第 17 号墳の周溝と上坑で一部壊されている他は残っている。内法の大きさで、南北 6.0m、東西 5.5m の方形となる。周溝の幅は 0.5m ～ 1.0m で、深さは 20 cmほどである。周溝内からは 2 点須恵器蓋が出土しているが、61（第 54 図）は周溝内のピットから出土したもので、この古墳に伴うものかどうかは不明である。

出土遺物は第 54 図 61 と 62 で、須恵器蓋である。61 の天井部は平らで、体部との境目に明瞭な稜をもつ。口縁部は体部上位で角度を変えながら外側に直線的にのびる。端部は尖る。62 も天井部は平らで、体部との境目に明瞭な稜をもつ。口縁部はゆるく内湾する。61・62 ともに、体部から口縁部はヨコナデを施すが、天井部にはヘラ切りの痕跡が残る。



第 54 図　B3 区第 18 号墳出土遺物（1/3）

第 55 図　B3 区 SD149 出土遺物実測図（1/3）



1. 10YR4/2灰黄褐色土　しまりやや強く粘性なし、φ1～2mmの地山ブロックをまばらに含む
2. 10YR3/2黒褐色土　しまりやや強く粘性なし、φ1～3mmの地山ブロックをまばらに含む、φ3mmの灰黄褐色土を微量に含む
3. 10YR3/1灰黄褐色土　しまりやや強く粘性なし、φ2mmの地山ブロックを微量に含む、土質はサクサクしている
4. 10YR3/2黒褐色土　しまりやや強く粘性やや弱い、φ2mmの地山ブロックをまばらに含む、3層より明るく、2層より暗い
5. 10YR2/2黒褐色土　しまり強く粘性なし、地山ブロックをまんべんなく含む

作業溝

6. 10YR4/2灰黄褐色土　しまり強く粘性なし、地山ブロックをまばらに含む
7. 10YR5/4にぶい黄褐色土　しまりやや強く粘性やや弱い、地山ブロックをまんべんなく含む

撹乱部

1. 10YR4/2灰黄褐色土　しまりやや強く粘性なし、φ3～4cm程度の地山ブロックをまばらに含む、黒色ブロックをまばらに含む
2. 10YR5/2灰黄褐色土　しまり強く粘性やや弱い、φ2cm程度の地山ブロックを微量に含む

0　2m

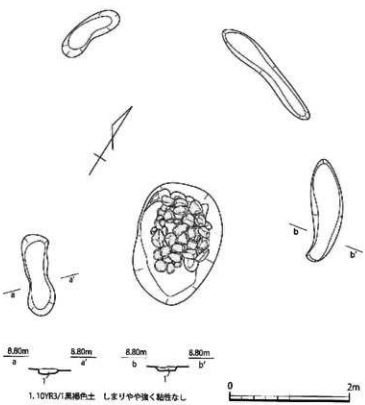
第56図　B3区第18号墳主体部（1/40）

第18号墳の周溝を切る溝SD149からは、第55図63が出土している。ほぼ完形の須恵器高坏であるが、口縁部の一部に欠損が認められる。坏部は、内湾気味に立ち上がり中位で外反し、口縁端部は尖る。坏部は焼き歪みがある。脚部は短く、端部がゆるく外湾する。

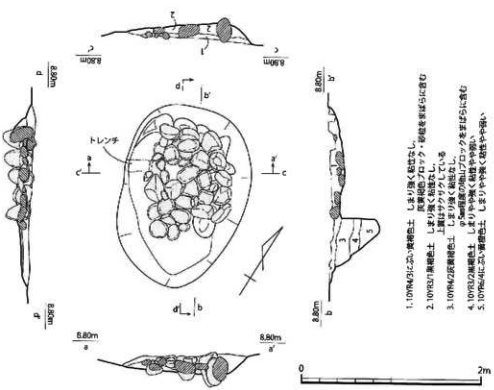
第19号墳

第20号墳と並んで確認された石室墳である。周溝は部分的に確認できたが、完全な正円にならず、楕円形を呈する。

石室は、皿状に掘られた2.0m×1.4mの楕円形の堀方にやや嗣張り状に人頭大の側石を並べ、ほぼ同じ大きさの川原石を床面に敷いている。南側の側石がないことからこちら側が入口とわかる。しかし、他に入口部を示す構造は確認できなかった。出土遺物は無い。



第57図　B3区第19号墳（1/60）



第58図　B3区第19号墳主体部（1/40）

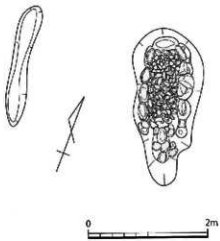
周溝は4カ所で確認されたが、いずれも10cm程度と浅い。幅は最大で0.5m、長さは約2mである。遺物の出土は無い。楕円形だとすると、長軸7m、短軸4mほどとなろう。

第20号墳

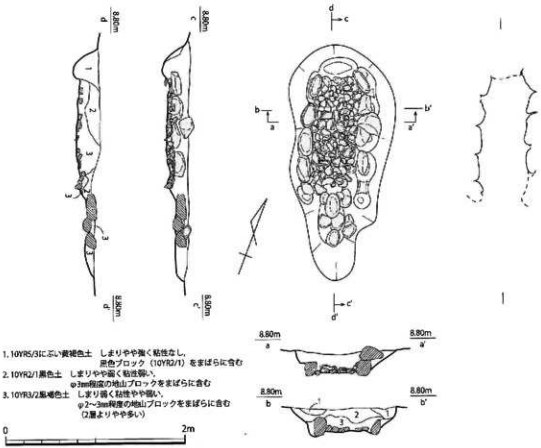
第19号墳に隣接する全長1.5mの石室を持つ古墳である。周溝は、部分的に2カ所で残るが、復原すると一辺5m程度のごく小規模な方墳となる。

主体部は、奥壁と入口部に近い左右の側石を除けば、最下段の石は残り、床面の拳大の礫敷きも残っている。そこから推測される石室内部の大きさは、長軸1.5m、短軸0.5mと小型である。玄門部には床に人頭大の礫があったことから、この部分で礫積みの閉塞を行っていたことが推測できる。羨道と思われる幅0.4m、長さ0.9mの溝が接続している。遺物の出土は無い。

周溝は、幅20～30cmで深さ数cmの溝が北側と西側で、それぞれ約2m確認できた。ほとんど痕跡程度であるが、位置からしてこの石室に伴う周溝と考えられる。



第59図　B3区第20号墳（1/60）



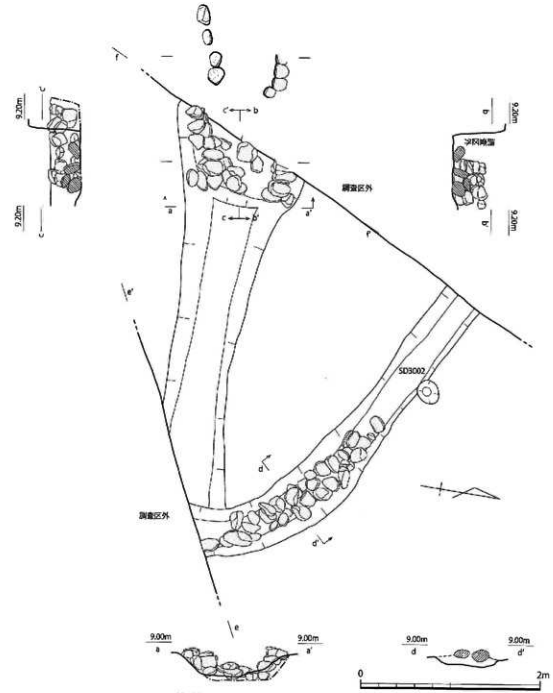
第60図　B3区第20号墳主体部（1/40）

第21号墳

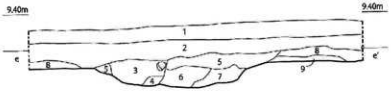
B4区で確認された古墳で、墓道が調査区外の段丘崖に向かって東に3.4m延び、石室は大部分が調査区外となり、入口部の石積みを確認できたに過ぎない。しかし、墓道を切るSD3002が周溝の可能性があるので、周溝であるとすればやや長楕円形の円墳になるだろう。SD3002には部分的に人頭大の川原石が集中していた。幅は0.5～0.6mで、深さは約20cmであった。

石室は、墓道から10cmほど下り、両側面に三段程度の石積みが確認できる。この石積みは他例からすると、石室そのものの側石と思われる。人頭大の川原石を使用し、一部は床面に転落している状況である。調査区内での石室堀方の幅は最大1.5mとなり、コーナー部にやや丸みを持った長方形の石室となろう。

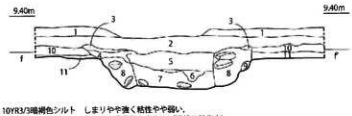
墓道は、調査区外との境のところでSD3002から切られている。出土遺物は無い。



第61図　B4区第21号墳・SD3002 (1/40)



1. 10YR3/3暗褐色シルト　しまりやや強く粘性やや弱い。
白色粒・黒色粒を含む　（現代の耕作土）
2. 10YR2/2黒褐色シルト　しまりやや強く粘性やや強い。
白色粒・黒色粒・炭・焼土を含む　（旧耕作土か）
3. 10YR2/2黒褐色シルト　しまりやや強く粘性やや強い。
白色粒・黒色粒をわずかに含む。
最大径約20cm以上の円礫が偏中して出土　（SD3002基盤の堆積層）
4. 10YR2/1黒色シルト　しまりやや弱く粘性やや弱い。
白色粒・黒色粒をわずかに含む　（SD3002基盤の堆積層）
5. 7.5YR2/1黒色シルト　しまりやや強く粘性やや強い。
褐色・暗褐色シルトがブロック状に混じる。
白色粒・黒色粒をわずかに含む　（第21号墳墓道の堆積層）
6. 10YR2/1黒色シルト　しまりやや弱く粘性やや弱い。
褐色・暗褐色シルトが、ブロック状に混じる（5層より少ない）。
白色粒・黒色粒をごくわずかに含む　（第21号墳墓道の堆積層）
7. 7.5YR2/1黒色シルト　しまりやや強く粘性やや弱い。
多くの褐色・暗褐色シルトがブロック状に混じる。
白色粒・黒色粒をわずかに含む　（第21号墳墓道の堆積層）
8. 10YR2/1黒色シルト　しまりやや強く粘性やや強い。
白色粒・黒色粒を含む。
（墳域以前の堆積層）
9. 10YR2/3黒褐色土　しまりやや強く粘性やや強い。
白色粒・黒色粒をわずかに含む　（墳域以前の堆積層）



1. 10YR3/3暗褐色シルト　しまりやや強く粘性やや弱い。
白色粒・黒色粒を含む　（現代の耕作土）
2. 10YR2/2黒褐色シルト　しまりやや強く粘性やや強い。
白色粒・黒色粒・炭・焼土を含む　（旧耕作土か）
3. 7.5YR2/1黒色土　しまりやや強く粘性やや強い。
白色粒・黒色粒を含む。
暗褐色シルトがブロック状に混じる　（第21号墳主体部の最上層埋土か）
4. 10YR2/2黒褐色シルト　しまりやや強く粘性やや強い。
白色粒・黒色粒・焼土をわずかに含む　（第21号墳石室側壁上部の堆積層）
5. 10YR2/1黒色シルト　しまりやや強く粘性強い。
白色粒・黒色粒をごくわずかに含む
暗褐色シルトがブロック状に混じる　（第21号墳玄室内の埋土）
6. 10YR2/2黒褐色シルト　しまりやや強く粘性やや強い。
多くの褐色・暗褐色シルトがブロック状に混じる　（第21号墳玄室内の埋土）
7. 7.5YR2/1黒色シルト　しまりやや弱く粘性やや強い。
褐色・暗褐色シルトがブロック状に混じる（6層より少ない）　（第21号墳玄室内の埋土）
8. 10YR2/3黒褐色シルト　しまりやや強く粘性やや弱い。
多くの褐色・暗褐色シルトがブロック状に混じる　（第21号墳玄室側壁の崩ちもしくは盛砂の土）
9. 10YR2/2黒褐色シルト　しまりやや強く粘性やや弱い。
白色粒・黒色粒をわずかに含む　（第21号墳玄室最方の埋土）
10. 10YR2/1黒色シルト　しまりやや強く粘性やや強い。
白色粒・黒色粒を含む　（第21号墳以前の堆積層）
11. 10YR2/3黒褐色シルト　しまりやや強く粘性やや強い。
白色粒・黒色粒含む　（第21号墳以前の堆積層）

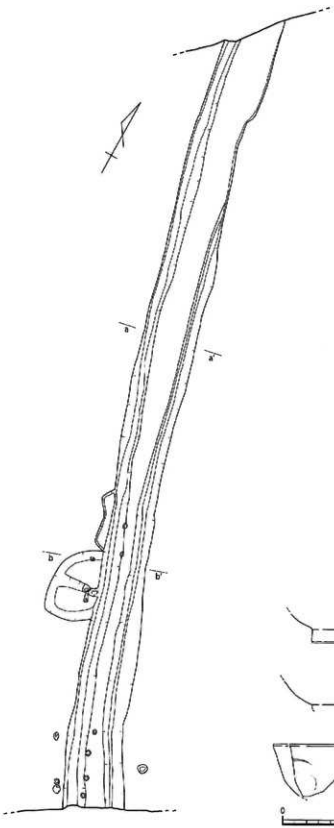
0　2m

第 62 図　B4 区第 21 号墳・SD3002 土層（1/40）

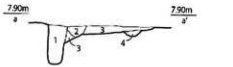
溝

SD2001

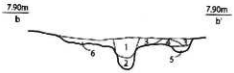
B1 区で確認された溝である。幅は 1.0 ～ 1.2m であるが、断面図からわかるように、浅い溝を西側の深い溝が切っている。長さは調査区内で 18.0m 確認したが、やや全体的に湾曲している。深さは浅い部分で 10 cm程度、西側の溝が 30 cm程度である。



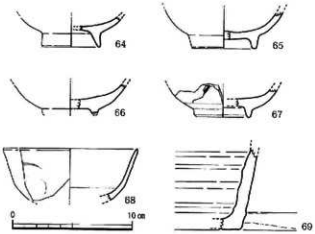
第 63 図　B1 区 SD2001（1/80・1/40）



1. 10YR3/2黒褐色シルト　しまり弱く粘性弱い、
褐色シルトがブロック状に混じる、
砂質土を含む
2. 2.5YR4/3オリーブ褐色土　しまりやや強く粘性やや弱い、
暗褐色シルトがブロック状に混じる、
砂質土を含む
3. 10YR4/3にぶい黄褐色土　しまりやや強く粘性やや弱い、
黄褐色シルトがブロック状に混じる、
砂質土を含む
4. 10YR3/3暗褐色シルト　しまりやや強く粘性やや強い、
黄褐色シルトがブロック状に混じる、
砂質土を含む



1. 10YR2/2黒褐色シルト　しまり弱く粘性弱い、
黄褐色シルトがブロック状に混じる、
砂質土を含む
2. 10YR3/2黒褐色シルト　しまり弱く粘性弱い、
褐色シルトがブロック状に混じる、
砂質土を含む
3. 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト　しまり弱く粘性弱い、
黄褐色シルトがブロック状に混じる、
砂質土を含む
4. 2.5Y5/4黄褐色シルト　しまりやや強く粘性やや強い、
黒褐色シルトがブロック状に混じる、
砂質土を含む
5. 2.5Y3/2黒褐色シルト　しまりやや強く粘性やや弱い、
黄褐色シルトがブロック状に混じる、
砂質土を含む
6. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色土　しまり弱く粘性弱い、
黄褐色シルトがブロック状に混じる、
砂質土を含む



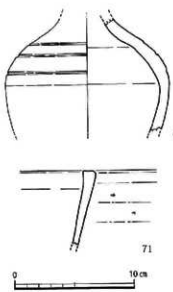
第 64 図　B1 区 SD2001 出土遺物（1/3）

出土遺物は第64図64～69で、すべて近世陶器である。64～66は肥前系陶器碗の体部から底部。67は肥前系陶胎染付碗の体部から底部。68は肥前系陶器碗の体部。69は表面に黒色釉を施した陶器の底部。瓶か。

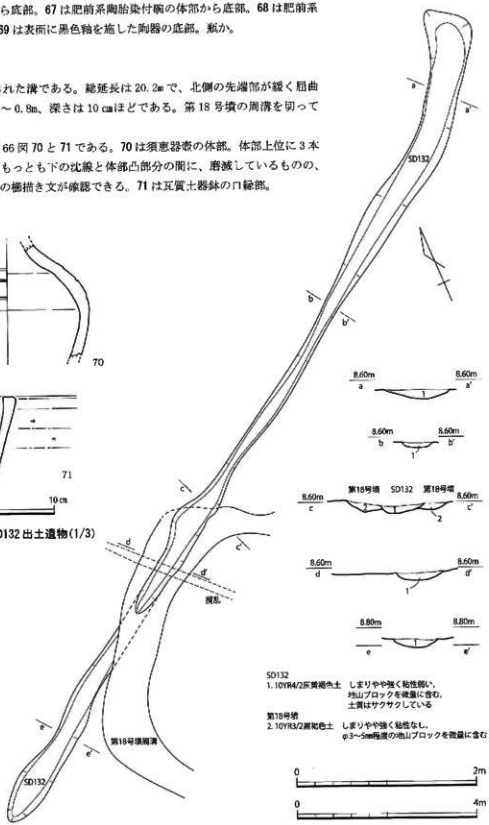
SD132

B3区で確認された溝である。総延長は20.2mで、北側の先端部が緩く屈曲する。幅は0.3～0.8m、深さは10cmほどである。第18号墳の周溝を切っている。

出土遺物は第66図70と71である。70は須恵器壺の体部。体部上位に3本の沈線を施す。もっとも下の沈線と体部凸部分の間に、磨滅しているものの、連続する斜方向の櫛描き文が確認できる。71は瓦質土器鉢の口縁部。



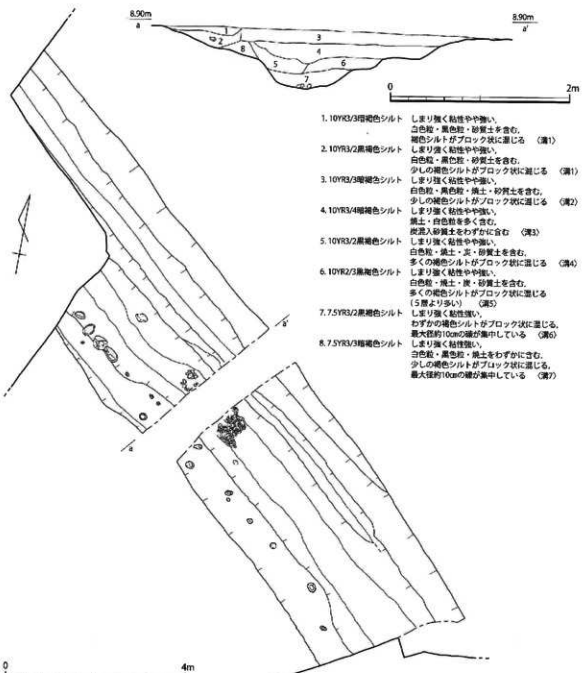
第66図　B3区SD132出土遺物(1/3)



第65図　B3区SD132 (1/80・1/40)

SD3003

B4区で確認された溝である。幅3.4m、深さ0.6mである。当初の溝（8層）を4～7層の溝が切って、更に1、2層の溝が3層を挟んで切っている。つまり、少なくとも2度の掘り直しが認められる。この溝を南東に延長すると数m で崖になることから、この溝は崖面を登って来る道と接続する道路跡と考えられる。溝中から近世以降の陶磁器片や土器片が僅かに出土しているので、近世以降の掘削と判断した。



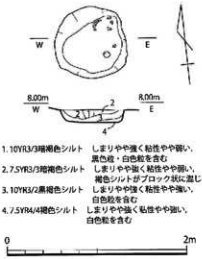
第67図　B4区 SD3003（1/80・1/40）

土坑

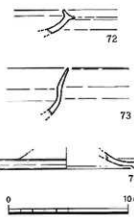
SK1008

B2 区の第 7 号墳の墓道横で確認された土坑である。直径 0.8m で、深さは 0.2m である。

出土遺物は第 69 図 72 ～ 74 で、すべて須恵器である。72 は坏身の口縁部。73 は高坏坏部。体部下半から外傾して直線的にのび、端部は尖る。器厚は薄く、つよい焼き歪みがある。74 は高坏脚部。



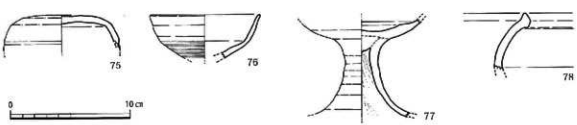
第 68 図　B2 区 SK1008（1/40）



第 69 図　B2 区 SK1008 出土遺物（1/3）

B2 区包含層出土の遺物

出土遺物は第 70 図 75 ～ 78 で、すべて須恵器である。75 は高坏蓋。天井部は平らで、ヘラ切りの痕跡が残る。天井部と体部の境目に稜があり、稜より下位はヨコナデを施す。沈線が確認できる。76 は高坏坏部。口縁部は体部中位から直線的に外傾し、端部は尖る。体部中位より下にはカキメを施す。77 は高坏。脚部は外湾しながら下外方にむかい、徐々に薄くなる。断面には坏部と脚部の貼り付け痕跡が観察できる。78 は甕口縁部。ゆるく外湾し、端部は肥厚して面をなす。



第 70 図　B2 区包含層出土遺物（1/3）

旧石器時代の遺物

＜分布＞

定留鬼塚遺跡から旧石器時代後期の遺物が出土している。その出土状態は他時期の遺構に混在した状況での出土や旧石器時代の包含層からの出土である。出土範囲は B3 区南部で約 30 点出土している。この他、A 区で 2 点、B1 区で 2 点出土したものの B3 区南部以外の他調査区で回収された小型岩石類のなかに石器類は含まれていなかった。したがって旧石器時代後期の遺物集中部分は調査範囲内においては B3 区南部にほぼ限定できる。

B3 区南部での旧石器時代遺物の分布を観察すると、6 世紀代と考えられる第 18 号墳の周溝南西部に集中している。その規模は東西 4m ×南北 4m であり、外周部は礫らになっている。このように旧石器時代後期の遺物が集中して出土する範囲は通例「石器ブロック」と呼ぶものに該当する。

＜出土層位＞

B3 区南部周辺での土層は 6 枚確認されている（第 30 図）。旧石器時代遺物は 5 層：黒褐色土の中から出土しており、縄文時代以降の遺物は全く含んでいない。層位関係をみると砂質の 3 層・4 層と 5 層の間は不整合面であり、5 層面で 6 世紀代の方形墳が検出され、方形墳が削平された後に 3・4 層が堆積している。したがって 3・4 層は 6 世紀以降の堆積物であり、旧石器時代の堆積層ではない。旧石器時代遺物を包含する 5 層は黒い色調の

強い黒褐色土であり、周辺遺跡の層位状況から AT（姶良 Tn 火山灰）直下の黒色帯層と当面理解しておきたい。

＜遺物＞

遺物は、A 区 SD022 で使用痕のある剥片（第 22 図 47）・小型の石核（第 22 図 48）、B2 区第 9 号墳で台形様石器（第 39 図 56）・小型の石核（第 39 図 57）が出土している他は、B3 区南部の石器類である。基本的に石器ブロックとその周辺の石器類から構成される一群は、その集中性から一括資料と見做してよい可能性が高い。今、石器類の内訳を示すと、ナイフ形石器 1、スクレーパー 2、使用痕ある剥片（UF）1、彫刻刀形石器（ピュアリン）1、剥片 14、チップ 1、敲石 6 となる。なお、チップが 1 点というのは、この種の遺跡では通例ありえず、調査精度に由来するものと思われる。

本遺跡においては様々な石材が用いられており、石材毎の遺物の特徴を紹介する。

珪化木（植物の化石）は茶色系をした硬質の岩石で、本遺跡における石器類の大半を占める石材である。この珪化木を石材とする石器類は、詳しく観察すると色調・質感の違いから幾つかの個体に区分される。まず個体 1 は、接合資料 1（第 76 図 102 ～ 106：スクレイパー 1 点、剥片 4 点）・接合資料 2（第 75 図 100・101：RF・加工痕ある剥片 1 点、剥片 1 点）・ナイフ形石器 1 点（第 72 図 80）・剥片 6 点（第 73 図 88 ～ 90、第 74 図 91・92・94）からなり、いずれも東西 5.5 m×南北 4.5 m の旧石器トレンチ③に収まる。

接合資料 1 は同一の打面（複数の剥離痕からなる）から僅かに求心的な方向へ剥離されている。そのため個々の打面が接する関係にある。接合するスクレーパー及び 4 点の剥片は、長軸（剥離軸）の方が直交する幅よりもやや長い特徴があるが、形態は不定形である（第 76 図）。接合例の表面には同様な剥離が先行して行われこと を示すネガティブな面が残存している。先行する剥離が行われた後、スクレーパー（第 76 図 102）を剥離する。その後、打点を 3.5 cm左にずらして接合資料の中央に残るネガ面の剥離が行われる。次に打点を 3 cm左にずらして剥片（第 76 図 106）が剥離される。1.5 cmほど打点を右にずらし、剥片（第 76 図 104）が剥離される。次に打点を 1 cm左にずらして剥片（第 76 図 105）が剥離される。次に打点を 1.5 cm右にずらして剥片（第 76 図 103）が剥離される。なおスクレーパーの整形加工はやや急角度であり、ナイフ形石器の未成品と考えるべきかもしれない。

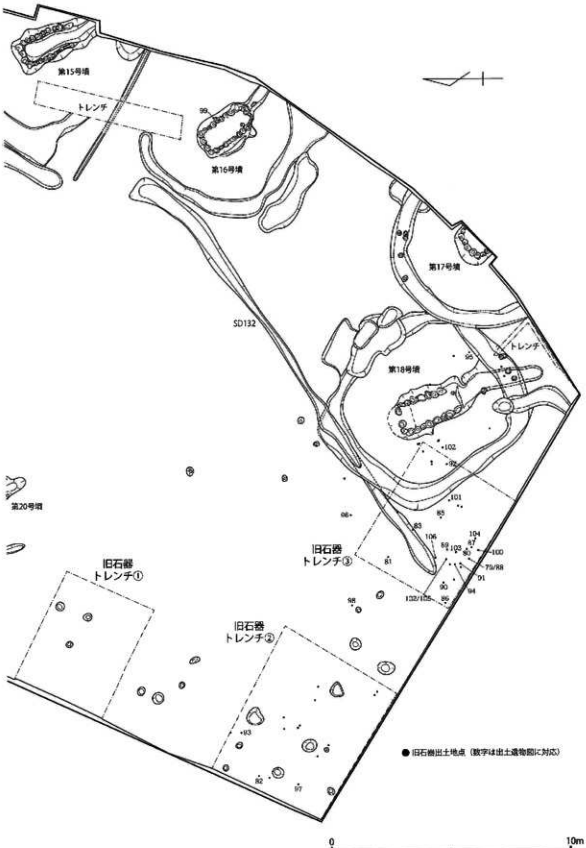
接合資料 2 は（第 75 図）、おそらくは円盤状を呈する石核の表裏が接する縁部を取り込むように真横から剥離した断面三角形の剥片（第 75 図 100）と、やや細長い RF（加工痕のある剥片）からなる（第 75 図 101）。細長い RF の打面部（素材剥離時の打面でネガ面）が断面三角形の剥片の打面部に近い主要剥離面（ポジ面）に接合した例である。整理すると最初に断面三角形の剥片が剥離された面を打面とし、次に先行する剥離と逆方向へ断面三角形の小型剥片が剥離されている。その後、断面三角形の小型剥片は RF（第 75 図 101）に加工している。

個体 1 に属するナイフ形石器（第 72 図 80）は、素材の長軸が斜行するノ字形剥片を素材に用い、尖端近くの左側縁を整形した例で、右側縁は素材時の打面部が残る。

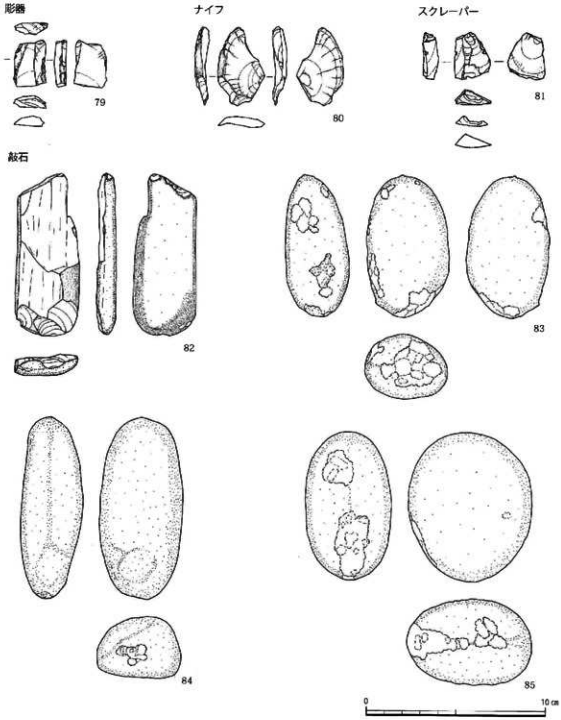
この他、接合資料以外で個体 1 に属する資料に剥片がある（第 73 図 88 ～ 90、第 74 図 91・92・94）。

個体 2 として、珪化木を石材とした彫器がある（第 72 図 79）。本例は、素材に石刃を用い、両端部を折断後、折断面を打面とした 2 回のファシットによって縁部に彫器としての刃部を形成している。個体 3 として、珪化木を石材としたスクレーパーがある（第 72 図 81）。浅い加工を右側縁に施す。端部を折断し、この面を打面として表面側に剥離を施しており、あるいは彫器の未成品かもしれない。個体 4 として推定多久産サヌカイトを石材とした剥片（第 74 図 95）、個体 5 として推定多久産サヌカイトを石材としたチップ（第 74 図 97）、個体 6 として姫島産角閃石安山岩（ガラス質安山岩）を石材とした横長剥片（第 74 図 93）、個体 7 として大野川産流紋岩を石材とした UF がある（第 74 図 96）。個体 2 ～個体 7 は単品であり、剥片もしくは成品の状態で搬入されたことが窺える。ただし個体 5 のチップは、大きさが極小であることから搬入された石器の成品もしくは剥片が破損したものと推定できる。

石核は個体 8 として赤色チャートを石材とする拳大の例（第 75 図 99）と個体 9 として玉髄もしくは石英を石材とする 3 cm大の小型例がある（第 75 図 98）。前者は、表面の大半が自然面で覆われており、剥離面をみると薄く、剥離した剥片を石器に加工した可能性は低い。個体 8、個体 9 には石核 2 点の他に資料はなく、遺跡内での積極的な剥離作業は窺えない。

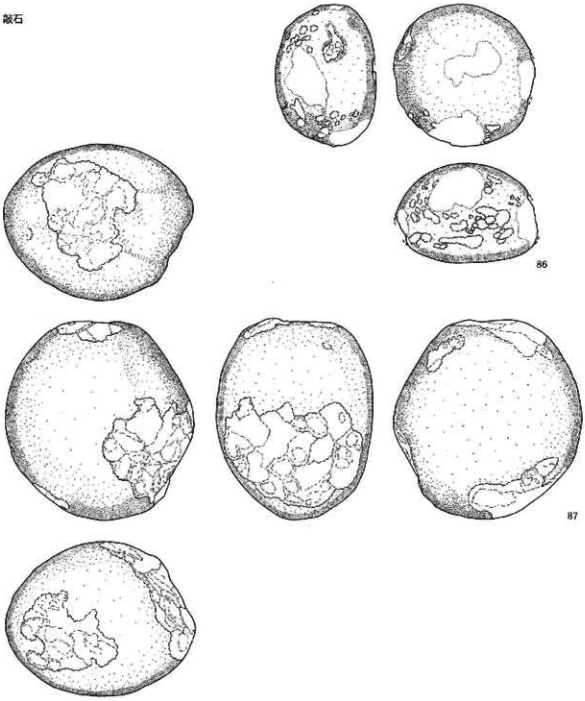


第 71 図　B3 区包含層出土旧石器分布図（1/150）

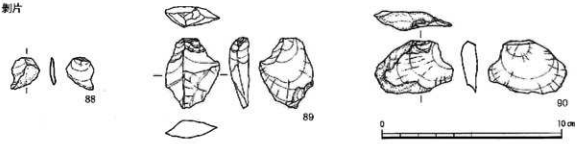


第 72 図　B3 区包含層出土旧石器 1（1/2）

敲石



剥片



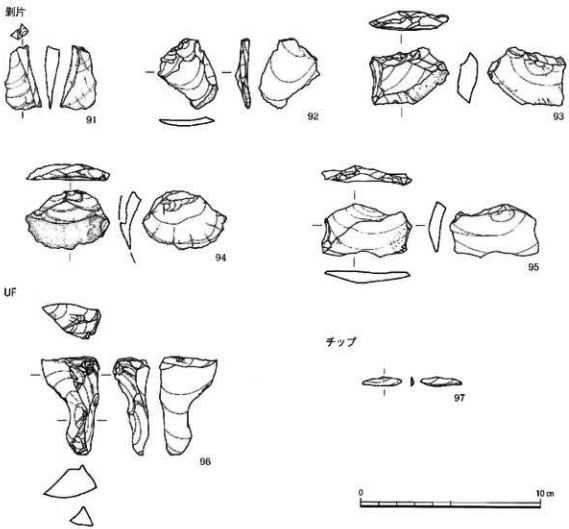
第 73 図　B3 区包含層出土旧石器 2 (1/2)

石器ブロックとしては規模が小さいものの、敲石は6点出土している。中・大型の楕円礫を用いた例（第72図85、第73図86・87）、やや細身の長楕円礫を用いた例（第72図83・84）、扁平礫を用いた例（第72図82）がある。扁平礫を用いた例には剥離痕があることと、器体が小型であるということから石器加工用のものと推定される。その他の敲石には著しい衝撃痕が見られず、硬質の珪化木を打ち割るにはやや軟質なことから石器の加工用でない可能性もある。

編年上の位置づけを行うにあたっての情報は極めて少ないが、彫器の素材に石刃を用いていることが参考になる。大野川流域で黒色帯層中の石刃石器群といえば駒方遺跡群の下層で観察される二側縁加工のナイフ形石器段階があり、本遺跡の石器群もその段階のものと今は考えておきたい。

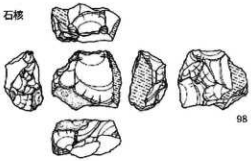
本遺跡の個体1は、珪化木を石材とした14点の資料を中心とし成り立っている。これに単品ではあるが珪化木を石材とした個体2・3、そして赤色チャートを石材とした個体8・玉髄～石英を石材とした個体9などを含めて考えると、珪化作用の強い石材を用いている点に特徴がある。同様な傾向は、宇佐市峰源遺跡でも窺える。旧石器時代の石器の石材をみると、大野川流域や大分平野周辺では流紋岩が大きな比重を占めていることからすれば、県北地域では剥片生産を行う為の良質で豊富な石材のないことが関係しているのかもしれない。珪化木・玉髄等の使用はこの地域の特徴を示していると考えられる。

本遺跡の旧石器時代資料は少ない。資料数からすれば、極短期間の滞在で形成されたことが推定される。

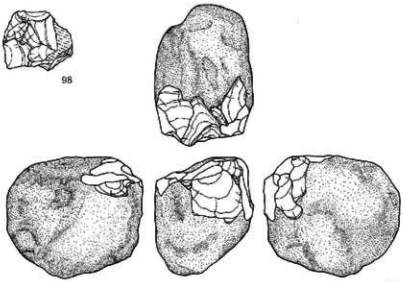


第74図　B3区包含層出土旧石器3（1/2）

石核

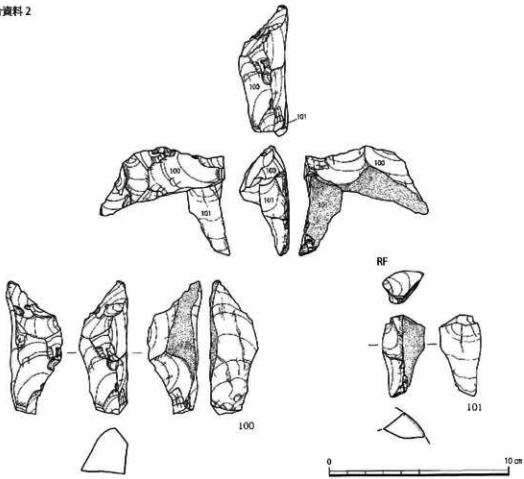


98



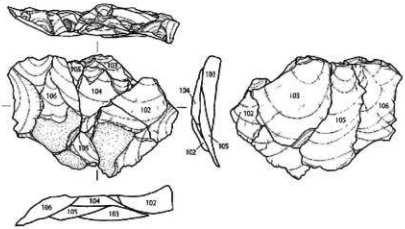
99

接合資料 2

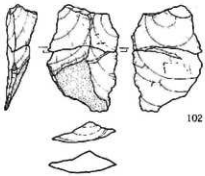


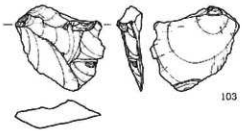
第 75 図　B3 区包含層出土旧石器 4 (1/2)

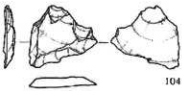
接合資料 1

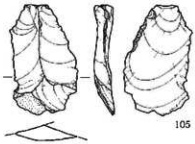


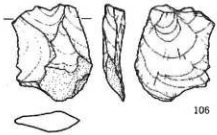
スクレーパー











第 76 図　83 区包含層出土旧石器 5 (1/2)

第4章　総括

ここでは、主に古墳時代後期から終末期にかけての小石室墳について述べたい。20基の小石室墳はほとんど周溝が残っていないが、残っているものでは方墳が3基、円墳が4基となる。第1号墳と第8号墳は墳丘外まで延びる長大な墓道を持つ。その他にも第3号墳、第5号墳、第6号墳、第7号墳、第21号墳などは、墳丘外まで墓道が延びていた可能性がある。石室プランは、縦方向への長方形プランが基本であるが、第9号墳は石積みは全て失われているものの、石室堀方は横方向へ若干広い長方形プランを呈するなど、例外もある。構造的には、遺物が最も多く出土した第1号墳が、比較的大きな腰石を使用し、袖石と思われる石もあるなど、しっかりとした造りになっている。その他の石室は、ほぼ同じ大きさの川原石を一段目から積み上げ、明確な袖石も無いなど、簡略的な印象を受ける。このような点に注目して、以下で若干のまとめを行いたい。

〈立地〉

第77図は定留鬼塚遺跡周辺の地形図から、標高5mラインで区分けした図である。古墳時代の海岸線を復原するのに目安となる。少なくとも、ダイハツ九州工場とした場所は、近代の埋め立てによるものであり、古墳時代は海であった。今回調査したA区とB区および中津市教育委員会が調査を行った定留遺跡八反ガソウ地区で検出された小石室を主体部とする古墳は、いずれも海に面した崖面に近い場所にあることがわかる。定留鬼塚遺跡A区から定留遺跡八反ガソウ地区の距離は約1kmである。この間に途切れることなく無く古墳が築かれていたとは考えがたいが、丘陵内部に展開する集落ごとに墓域を設定していた可能性が考えられるだろう。

〈系譜と被葬者像〉

類似の古墳群は、中津市内の相原山首遺跡（永添遺跡）で発掘されている。概報のみで全体は窺い知れないが、小石室を伴う方墳（以下、「小石室墳」と呼ぶ）が6基、主体部に蔵骨器を直葬したものが1基調査されている。古墳の規模は、10m×9m～5.3m×5mまでと小型で、定留鬼塚遺跡の古墳とほぼ同規模である。さらに共通点を探れば、6基の内5基は周溝の外まで長く延びる墓道を有していることがあげられる。石室については、3基が腰石を持つが、他は一段目から人頭大の川原石を積むなど、定留鬼塚遺跡と共通点を持つ。時期は出土遺物から7世紀から9世紀前半とされ、蔵骨器を持つものが一番新しい。この相原山首遺跡の最大の特徴は、8世紀後半に石室墳から火葬墓（周溝を伴わない火葬墓が16基ある）へと変遷を遂げることにあり、至近にある7世紀末の創建になる相原廃寺の存在も考慮に入れて、被葬者は官人層が想定されている。この相原山首遺跡のある場所は、下毛原と呼ばれる洪積台地が山国川に接するように突き出た箇所にあたる。その崖面には上ノ原横穴墓群や坂手前横穴墓群などの横穴墓が5世紀後半から7世紀前半まで造営される。さらに台地上には4世紀後半から5世紀の古墳が点在している。つまり、古墳－横穴墓－小石室墳－火葬墓という墓制の変遷を辿ることが出来るのである。小石室墳は、そのような墓制の変遷の中で捉えねばならない、ということである。

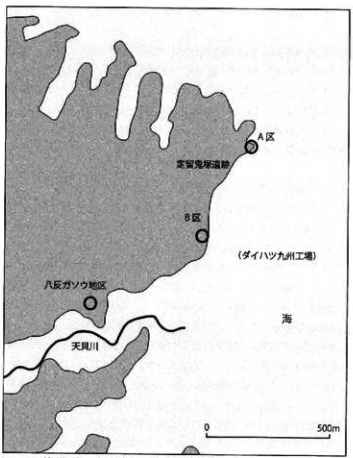
一方で、豊前南部の地にも数は少ないが、巨石を用いた横穴式石室墳が存在する。上ノ原横穴墓群周辺にも6世紀後半の相原1号墳、2号墳（何れも消滅）がある。村上久和氏は横穴墓と横穴式石室墳という形態上の差異を「階級的格差は認められず」、「部族あるいは氏族などの出自集団の差と考えるべきであろう」とする（村上1991）。このことは、横穴式石室墳が少ない大分県全体に敷衍できるだろう。そのような中で、小石室墳が突如造られる背景には何があるのだろうか。

定留鬼塚遺跡では6世紀後半には第1号墳が作られ、7世紀にかけて造営が続く。一方、相原山首遺跡では、追葬の問題は残るが、出土遺物を見ると7世紀代から8世紀の前半まで続く。相原山首遺跡では、石室の構築に腰石を使用するものが半数あるが、定留鬼塚遺跡では20基中1基（第1号墳）のみである。当初は、第1号墳が最も古いことから、6世紀後半段階では腰石を使用するものかと考えたが、相原山首遺跡を見ると時期の問題ではないことがわかる。第1号墳の出土遺物の多さを考えると、腰石の使用・不使用は、被葬者の何ちかの格差を反映したものと考えた方が良いのかも知れない。

ところで、定留地区を流れる犬丸川流域の遺跡を見ると、上流域には6世紀後半に操業が始まる伊藤田窯跡群があり、集落も6世紀初頃から出現するが、増加するのは6世紀後半代になってからである。下流域では、さ

らに遅れて6世紀末頃から集落が増加するようである。海岸部に進出してくるのは、「海にかかわる集団」（中津市 1977）の存在があるとされるが、定留鬼塚遺跡の被葬者はまさに海との関係を考えねばならない。そうすると、新たに進出してきた「海部集団」の墓制が小石室墳であったことになる。

定留鬼塚遺跡や相原山首遺跡の小石室墳は長大な墓道を持ち、上ノ原横穴墓群における新しい時期の横穴墓（Cタイプ：上ノ原Ⅲ期新～Ⅵ期、6世紀から7世紀前半）と類似しているものもある。定留鬼塚遺跡では、6世紀後半代という横穴墓全盛期にそれに類似した横穴式石室墳を構築したことになる。定留鬼塚遺跡周辺では横穴墓の存在は知られていない。これには地形的な要因が大きいだろう。すなわち、横穴墓を構築できるような、ある程度の高さを持った、比較的硬い地盤の崖面がほとんど存在しないのである。このことから、横穴墓の思想を取り入れた小石室を持つ横穴式石室墳を構築したと考えられる。



第77図　古墳時代の推定海岸線（標高5mライン）

参考文献

村上久和「(5) 上ノ原墳墓群の変遷」『上ノ原横穴墓群Ⅱ』 大分県教育委員会　1991

『永添遺跡　中津城　ホヤ池窯跡』 中津市教育委員会　1993

『犬丸川流域遺跡群』中津市教育委員会 1977

『定留遺跡八反ガソウ地区発掘調査報告書』 中津市教育委員会　2006

『神代地区条里跡　長者屋敷官衙遺跡　定留鬼塚遺跡』 中津市教育委員会　2013

遺物一覧表

出土遺物一覧表（土器）

遺物番号	図版番号	遺構番号	種別	器種	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	法量 底径(cm)	調整 外面	調整 内面	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 石英	胎土 その他	備考
1			須恵器	坏蓋	(10.8)	2.9+		ヨコナデ	ヨコナデ		○		○	
2			須恵器	坏蓋	(13.4)	2.5+		回転ヨコナデ　ナデ	回転ヨコナデ					
3			須恵器	坏蓋	(13.8)	4.2		回転ヘラケズリ　指ナデ	回転ヨコナデ		○			
4			須恵器	坏蓋	(15.6)	5.[illegible]		回転ヨコナデ　回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ		○			
5			須恵器	坏身	9.1	2.9		回転ヘラケズリ　ヨコナデ	ナデ　ヨコナデ	○	○		●	
6			須恵器	坏身	(9.2)	3.3		回転ヨコナデ	回転ヨコナデ					
7			須恵器	坏身	9.4	3.2		回転ヘラケズリ　ヨコナデ	ナデ　ヨコナデ		○		○	
8			須恵器	坏身	11.1	3.3〜4.[illegible]		回転ヨコナデ　回転ヘラケズリ後ナデ	回転ヨコナデ	○	○			
9			須恵器	坏身	11.6	4.0		回転ヘラケズリ　ヨコナデ	ヨコナデ　ナデ				○	
10			須恵器	坏身	(13.0)	3.9	5.8	回転ヘラケズリ　回転ヨコナデ	回転ヨコナデ　指ナデ				○	
11			須恵器	高坏蓋	(11.6)	3.0+		回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		○		○	
12			須恵器	高坏蓋	(11.2)	4.0		ヨコナデ　ヘラケズリ後ケズリ	ナデ　ヘラナデ		○		●	
13	第12図	第1号墳	須恵器	壺蓋				回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	○	○			
14			須恵器	甕	7.7	4.8		底部ヘラケズリ　回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	○	○			
15			須恵器	高坏	13.8	2.1		回転ヘラケズリ　ヘラナデ	ナデ　ヨコナデ	○			●	
16			須恵器	壺坏		5.2+	(12.0)	回転ヨコナデ　透かし（2段が3ヶ所）	回転ヨコナデ	○				
17			須恵器	ハソウ		8.2+	13.0	ナデ　ヨコナデ　櫛かし（段部1つ3ヶ所）	ナデ　ヨコナデ				○	
18			須恵器	瓶類		12.1+		沈線（2本ずつ3所）　ヘラケズリ　櫛描文	ナデ		○		●	
19			須恵器	長頸壺	2.8〜3.1	9.0		平持ちヘラケズリ　回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		○			
20			須恵器	平持ち壺台	子(9.1)	10.2+		ナデ　ヨコメ　ヘラケズリ　沈線（1本がほぼ1周）　櫛描	ナデ	○			○	
21			須恵器	壺				回転ヨコナデ　回転ヘラケズリ　回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ　回転ヨコナデ　回転ヨコナデ　工具ナデ		○			
22			須恵器	壺	(12.0)	7.3+		回転ヨコナデ　回転ヨコナデ	底部ヨコナデ		○		●	
23			須恵器	壺				回転ヨコナデ	底部ヘラナデ				●	
24	第13図	第1号墳	須恵器	甕				タタハリ　回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		●		●	
25			須恵器	壺				ヨコナデ	底で具痕				○	
26			土師質	鍋蓋	7.3	7.1		底面　歪孔（1つ1ヶ所）	ナデ　指圧痕	●	○	○	●	
27			土師質	鍋蓋				底面	ナデ	○	○		●	
28	第14図	SD014	須恵器	坏身	(12.8)	3.5		回転ヨコナデ　底部ヘラケズリ	回転ヨコナデ	●	○		●	
29			須恵器	高坏	(12.0)	3.[illegible]+		回転ヨコナデ	回転ヘラナデ	○			○	
31	第15図	第3号墳	須恵器	高坏蓋		2.4+		回転ヨコナデ　回転ヨコナデ	回転ヨコナデ				○	
32			須恵器	坏蓋	(13.2)	2.6+		回転ヨコナデ　回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ				○	
33			須恵器	坏身	13.1	3.4		回転ヨコナデ　回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	○				
34			須恵器	坏身				回転ヨコナデ	回転ヨコナデ					
35			須恵器	高坏蓋		1.2+		回転ヨコナデ	ナデ		○			
36			須恵器	高坏				ヨコナデ　沈線（最等7条ずつ本）透かし（段有1つ1ヶ所）	ヨコナデ		○		○	
37	第16図	SD016	須恵器	高坏		7.1+		回転ヨコナデ　透かし（最等1つ3ヶ所）	絞り痕　回転ヨコナデ	○	○			
38			須恵器	高坏				ナデ　沈線（段部2条）　透かし（段部1つ1ヶ所）	絞り痕	○	○			
39			須恵器	高坏		3.4+		回転ヨコナデ　透かし（2段が3ヶ所）	回転ヨコナデ					
40			須恵器	高坏		1.8+	15.2	沈線ヨコナデ	回転ヨコナデ		●			
41			須恵器	壺坏		3.5+	(15.8)	回転ヨコナデ　透かし（段部1つ4ヶ所）	回転ヨコナデ		●		●	
42			須恵器	ハソウ		3.7+		回転ヨコナデ	回転ヨコナデ				○	
43	第18図	SD016	須恵器	壺				ヨコナデ　櫛状痕ハケメ	ヨコナデ	○	●		○	
44			須恵器	壺				平行ヨコナデ	粗ロ円文		○			
45	第22図	SD022	土師器	高台付椀		2.8+	10.8	回転ヨコナデ　ナデ	回転ヨコナデ	○	○		○	
46			土師器	高坏		5.5+		ナデ　指圧（1つが2ヶ所）	底部	●	●			
49	第24図	SD025	須恵器	壺				回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		○			
50			須恵器	壺		5.5+		平行ヨコナデ　回転ヨコナデ	底で具痕　回転ヨコナデ		○			
51	第26図	SK015	須恵器	坏蓋	(13.0)	2.7		回転ヨコナデ　回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	○	○		○	
52	第39図	第9号壺	須恵器	平瓶				回転ヨコナデ　回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ　開口内側	○	○			
53			須恵器	平瓶				回転ヘラケズリ　回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ		○			
54			須恵器	壺	(18.0)			回転ヨコナデ　櫛描	回転ヨコナデ　櫛描	●	●			
55			須恵器	壺	(17.4)	7.0+		ヨコナデ　ナデ	ヨコナデ　ナデ			○		
61	第54図	第18号墳	須恵器	坏蓋	12.6	3.4	7.2	回転ヨコナデ　回転ヘラ切り	回転ヨコナデ			○		
62			須恵器	坏蓋	(12.6)	4.0		回転ヨコナデ　回転ヘラ切り	回転ヨコナデ			○		
63	第55図	SD149	須恵器	高坏		5.3〜6.9	6.5	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		○		○	
64			陶器	椀			(6.4)	施釉	施釉					
65	第64図	SD2001	陶器	椀			(5.2)	施釉	施釉					
66			陶器	椀				施釉	施釉					

遺物番号	図版番号	遺構番号	種別	器種	法量			調整		胎土				備考
					口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	角閃石	長石	石英	その他	
67			陶器	碗			(4.2)	施釉	施釉					
68	第64図	SD2001	陶器	碗	(11.0)			施釉	施釉					
69			陶器	瓶か				施釉	施釉		少			
70	第66図	SD132	須恵器	壺				回転ヨコナデ 波線（1条が2本）	回転ヨコナデ	少	少		少	
71			瓦質土器	鉢				ヘラケズリ ヘラミガキ	ナデ	多	少		少	
72			須恵器	坏身				回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	少	少			
73	第69図	SK1008	須恵器	高坏				回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		少			
74			須恵器	高坏			(11.2)	回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ		少			
75			須恵器	坏蓋	(9.4)	2.9+		回転ヘラケズリ 回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ		少			
76	第70図	B2区包含層	須恵器	高坏	(8.8)			回転ヨコナデ 回転カキメ	回転ヨコナデ	少	少			
77			須恵器	高坏				回転ヨコナデ	絞り成形回転ヨコナデ 回転ヨコナデ		少			
78			須恵器	壺				回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		少			

出土遺物一覧表（石器）

遺物番号	図版番号	遺構番号	器種	石材	法量				備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
30	第14図	SD014	石鏃	黒曜石	2.8	2.0	0.45	1.4	
47	第22図	SD022	LF	珪化木	4.3	2.8	2.2	16.2	
48			石鏃	珪化木	5.0	4.9	2.2	53.5	
56	第39図	第9号墳	台形石器		2.5	2.5	0.8	4.9	
57			石核		3.7	3.5	2.6	39.0	
79	第72図	B3区包含層	剥離	珪化木	2.6	1.9	0.6	3.4	個体2
80			ナイフ	珪化木	4.3	2.6	0.5	5.4	個体1
81			スクレーパー	珪化木	3.6	1.9	0.8	3.7	個体3
82			敲石	頁岩片岩	8.9	3.5	1.1	47.1	
83			敲石		7.8	4.6	3.6	120.4	
84			敲石		9.9	4.6	3.4	186.3	
85			敲石		8.2	6.8	4.8	338.1	
86	第73図	B3区包含層	敲石		7.8	7.8	6.5	344.1	
87			敲石		11	10.4	8.6	1220	
88			剥片	珪化木	1.75	1.6	0.25	0.6	個体1
89			剥片	珪化木	3.9	3.0	1.1	10.3	個体1
90			剥片	珪化木	2.9	4.3	1.1	11.4	個体1
91	第74図	B3区包含層	剥片	珪化木	3.5	2.0	0.7	3.3	個体1
92			剥片	珪化木	3.9	3.3	0.5	4.6	個体1
93			剥片	ガラス質安山岩	3.25	4.4	0.9	12.9	個体5
94			剥片	珪化木	3.2	4.6	1.0	8.6	個体1
95			剥片	サヌカイト	3.5	4.9	0.6	0.4	個体4
96			LF	流紋岩	3.4	3.2	1.6	17.6	個体7
97	第75図	B3区包含層	チップ	サヌカイト	0.4	2.2	0.2	0.2	個体5
98			石核	玉髄／石炭	3.3	3.8	2.2	27.6	個体9
99			石核	チャート	6.5	6.5	7.5	350	個体8
混合資料				珪化木	6	2.7	7.2	52.9	
100			剥片	珪化木	7.3	2.6	2.4	41.6	個体1
101			RF	珪化木	4.5	2.3	1.5	11.3	個体1
混合資料	第76図	B3区包含層		珪化木	6.7	9.5	1.4	90.4	
102			スクレイパー	珪化木	5.8	3.8	1.5	23.4	個体1
103			剥片	珪化木	4.7	4.7	1.2	19.8	個体1
104			剥片	珪化木	3.4	3.7	0.5	5.9	個体1
105			剥片	珪化木	6	3.5	0.9	16.2	個体1
106			剥片	珪化木	5.3	4.2	1.1	25.1	個体1

出土遺物一覧表（金属器）

遺物番号	図版番号	遺構番号	種別	器種	法量			備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	
58	第47図	第15号墳	鉄製	刀子	15.9+	1.5	0.8	
59			鉄器	鉄滓か	14.3+	7.5	0.4	
60			鉄器	鉄先	16.2+	3.0	0.4	

写 真 図 版

図版 1

A 区（東から）

A 区（北から）

A 区（上方が東）

A 区第 1 号墳

B3 区（西から）

B3 区（上方が東）

図版 2

B3 区北側

B3 区南側

第 17 号墳・第 18 号墳

B2 区（南から）

B2 区（北から）

B2 区（上方が東）

A 区完掘状況（南西から）

A 区完掘状況（北東から）

A 区第 1 号墳墓道

A 区第 1 号墳墓道

A 区第 1 号墳墓道

A 区第 1 号墳石室

A 区第 1 号墳石室

A 区第 1 号墳石室

図版 4

A 区第 1 号墳墓道

A 区第 1 号墳石室

A 区第 1 号墳石室完掘状況

A 区第 1 号墳墓道

A 区第 1 号墳遺物出土状況（墓道）

A 区第 1 号墳遺物出土状況（玄室）

A 区第 3 号墳

B2 区第 4 号墳

B2 区第 6 号墳

B2 区第 6 号墳

B2 区第 7 号墳

B2 区第 7 号墳玄室

B2 区第 7 号墳玄室

B2 区第 7 号墳玄室

B2 区第 7 号墳完掘状況

B2 区第 8 号墳

図版 6

B2 区第 8 号墳

B2 区第 9 号墳

B2 区第 9 号墳玄室

B2 区第 9 号墳遺物出土状況（墓道）

B2 区第 10 号墳

B2 区第 10 号墳玄室

B2 区第 10 号墳完掘状況

B3 区古墳検出状況

B3 区完掘状況（南から）

B3 区完掘状況（北から）

B3 区第 11 号墳玄室

B3 区第 11 号墳完掘状況

B3 区第 12 号墳玄室

B3 区第 12 号墳完掘状況

B3 区第 13 号墳玄室

B3 区第 13 号墳完掘状況

図版 8

B3 区第 14 号墳玄室

B3 区第 14 号墳完掘状況

B3 区第 15 号墳全景

B3 区第 15 号墳玄室

B3 区第 15 号墳玄室

B3 区第 15 号墳遺物出土状況（玄室）

B3 区第 15 号墳完掘状況

B3 区第 16 号墳全景

B3 区第 16 号墳玄室

B3 区第 17 号墳玄室

B3 区第 17 号墳完掘状況

B3 区第 18 号墳検出状況

B3 区第 18 号墳全景（南西から）

B3 区第 18 号墳全景（南東から）

B3 区第 18 号墳玄室

B3 区第 18 号墳玄室

図版 10

B3 区第 18 号墳完掘状況

B3 区第 19 号墳全景

B3 区第 19 号墳玄室

B3 区第 20 号墳全景

B3 区第 20 号墳玄室

B3 区第 20 号墳完掘状況

B4 区第 21 号墳全景

B4 区第 21 号墳玄室

B4 区第 21 号墳完掘状況

A 区 SD016

A 区 SD016

A 区 SD022

B4 区 SD3003

B4 区 SD3003

B1 区 SD2001

調査風景

図版 12

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
14
13
15
16
17
18
19
20
22
23
24
26
21
25
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44

45
46
49
50
51
52
53
54
55
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
接合資料 2
接合資料 1
47
48
56
57
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99

報告書抄録

ふりがな	さだのみおにづかいせき
書名	定留鬼塚遺跡
副書名	臨港道路中津港線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第81集
編著者名	小柳和宏　綿貫俊一　五十川育子
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870-1113 大分市大字中判田字ビワノ門1977番地　TEL 097-597-5675
発行年月日	2015年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
定留鬼塚遺跡（さだのみおにづかいせき）	中津市（なかつし） 大字定留（おおあざさだのみ） 字鬼塚他（あざおにづか）	44203	203282	33° 36′ 27″	131° 15′ 16″	1次1区（B3区） 2011/6/22～8/12	1907㎡	道路建設
						1次2区（A区） 2011/6/10～7/29	276㎡	
						2次1区（B2区） 2011/6/17～8/7	887㎡	
						2次2区（B1区） 2011/6/19～8/7	488㎡	
						2次3区（B4区） 2011/6/18～8/7	231㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
定留鬼塚遺跡	古墳	旧石器・古墳	古墳・溝・土坑	土師器・須恵器・鉄鏃先・旧石器	

要約	標高5m前後の海岸段丘崖に面した丘陵上で、海に向け高道が延びる計20基からなる古墳群が確認された。いずれも墳丘を失い、最も残りの良いものでも、石室の最下段の石積みが残されているのみであった。類似の石室墳の類例が少なく、また副葬品を持つものは少ないため、時期の決定に困難さがあるが、概ね6世紀後半から7世紀にかけてのものと考えられる。立地から、海と関わりを持った集団の墓と考えられる。 また、部分的に旧石器時代の包含層も確認された。

定留鬼塚遺跡

臨港道路中津港線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書　第81集

平成27年3月31日

編集・発行　大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113
大分市大字中判田字ビワノ門1977
TEL　097-597-5675

印　　刷　尾花印刷有限会社
〒877-0026
大分県日田市田島本町8-8
TEL　0973-23-0123